新制大日本讀本

巻三

375.9
F10
資料室

41651
教科書文庫
4
810
41-1931
20000
40285

昭和六年十一月九日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用

文學博士 藤村作編

新制大日本讀本

東京 大日本圖書株式會社

資料室
375.9
Fu10

日本海海戰の有名なる信號旗

廣島大學圖書印

廣島大學
教
40285
圖書

新制大日本讀本　卷三

目次

一　誠忠　小笠原長生　一
二　大地に立つ（詩）　福田正夫　七
三　天の逆鉾　（西遊記）　九
四　純なる心　（東京朝日新聞による）　二一
五　日本の風光　伊東忠太　二五
六　趣味の嚴島　五十嵐力　三三
七　蟲出づる頃　横山桐郎　三七

八　紅椿（詩）　三木露風　四六
九　豐臣太閤　三上參次　四八
一〇　蟹　薄田泣菫　五八
一一　國史に返れ　德富蘇峯　六一
一二　初夏（詩）　竹友藻風　六六
一　けむる草葉　六六
二　丘　六七
一三　日本海海戰（今日の海軍）　六九
一四　雨の趣味　黑田鵬心　九一
一五　曾呂利新左衞門（常山紀談）　九七

一六　英魂の前に　上田恭輔　一〇二
一七　二重橋の畔　沼波瓊音　一〇八
一八　桃山御陵　田山花袋　一一九
一九　一ノ宮だより　芥川龍之介　一二四
二〇　大根賣の話（鳩翁道話）　一二七
二一　悔悟の涙　小泉八雲　一三四
二二　「否」と「然り」　佐々木指月　一四一
二三　新月（詩）　北原白秋　一五〇
二四　修善寺にて　岡本綺堂　一五二
二五　武士氣質（藩翰譜）　一五九

二六　噫第四十三潛水艦　福田一郎　一六四

廣島大學圖書之印

小笠原長生
佐賀縣の人、慶應三年生、子爵海軍中將。

一　誠忠

小笠原長生

四月は吾人海軍軍人に取つて、最も思出の多い月である。明治三十七年の此の月は、露國との戰鬪が正に酣なる際で、我が聯合艦隊は、旅順に在つた露國艦隊に對して、連續不斷の攻勢を取り、すでに數回の砲擊を加へ、三月二十七日には、第二次の港口閉塞を試み、次いで此の

旅順港口閉塞

月に入つては、先づ旅順港外に機械水雷を沈置して、敵の堅艦を沈め、雄名世界に轟いた司令長官マカロフ中將を斃し、更に大規模な第三次の閉塞を計畫したのである。其の決行は五月三日であつたけれども、諸準備將校・下士卒の人選等は、凡て此の月に行はれたので、此の月は洵に記念すべき月である。

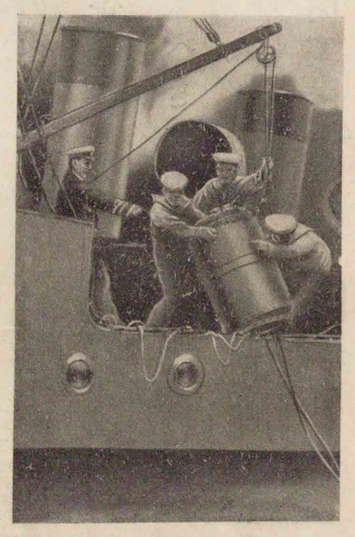
旅順港と市街

日本の閉塞船は砲彈雨注の下に引續きて來侵し、諸處に自ら沈没しぬ。その夜は波浪荒かりしかば、乘員多數の乘

虎尾半島
旅順港口を扼する半島、雞冠山砲臺があつた。

移りし端艇は、沖に出づること能はずして、却て岸に打寄せられぬ。其の中の一隻は虎尾半島に打揚げられしを以て、我が陸兵が其の乘員を捕へんと近寄りたるに、その互に首刎ぬる悲壯の狀を見て思はず戰慄しぬ。

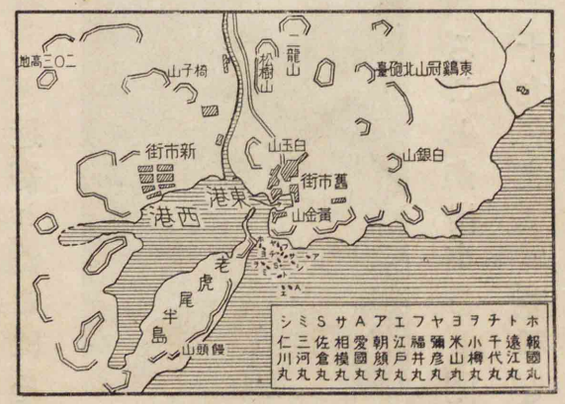
右は露國の海軍大佐ブーブノフと云ふ人の記事の一節であるが、これを見ても我が軍人の忠勇義烈の精神を知ることが出來る。閉塞に從事した將士百五十八名の中、七十九名までは、莞爾として生命を君國に捧げ、鬼神をさへ、其の壯烈に泣かしめたの



機械水雷敷設

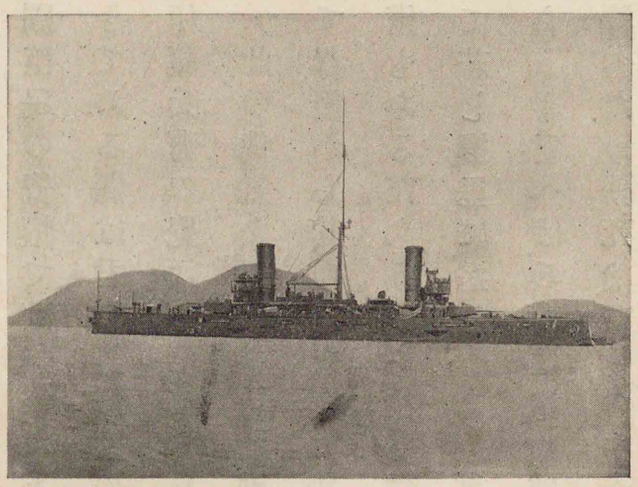
である。是等諸勇士の覺悟を記したならば、一として我々の生きた教訓でないものはあるまいが、就中朝顏丸に乘つて天晴な最期を遂げた、日進乘組の二等兵曹伊藤周助と云ふ人の覺悟の如きは、實に青年諸氏の學ぶべきものであらう。

愈、明日は決死の第三次閉塞隊が出發するといふ夜の事である。風は凪いで波は騷がず四邊は寂寞として根據地の夜は更けて行つた。十二時を報ずる頃、軍艦日進の副長が一室の



閉塞船沈沒位置

前を通ると、戸の隙間から燈火が洩れて居るので、まだ誰か起きてゐるものがあるかと戸を開けて見ると、伊藤兵曹が筆を執つて、書きものをして居るのであつた。兵曹は多少學問もあり、文筆の才もあるので書記補助員を命ぜられて居つたのである。此の頃は事務が頗る多忙であつたから、かく夜半までもコツコツと勤めてゐたのである。明日は命賭けの事をする



軍艦日進

のだから、もう事務などはどうでもよいと云ふのは、我が帝國臣民の覺悟では無い、たとひ一分でも一秒でも、苟くも生きてゐる間は君の御爲、國の爲にその義務を盡くすといふ伊藤兵曹の覺悟こそ、眞の日本人の覺悟といふべきである。

此の健氣な擧動を見た副長は、思はず其の誠心に感動して、背後から其の肩を撫で、其の覺悟を激賞し、且つ、明朝の準備もあるだらうから、少しは心身をも休めよと懇ろに諭して、若し鄕里に送るべき遺書か辭世の歌でもあるならば預らうと言へば、兵曹は深く感謝して、別に何もありませんと答へた。戰死後荷物の中から左の辭世の一首を發見した。

數ならぬ身を大君に捧げつゝ

福田正夫
明治二十六年神奈川縣小田原に生れた。詩人、小說家。

明日は沈まむ旅順港口

歌の巧拙はともかくもあれ、兵曹の人格と忠誠とを知つてゐる予は、此の歌を唱へる毎に、言ふべからざる感に打たれて、肅然容を正さざるを得ないのである。（鐵櫻隨筆）

二　大地に立つ

福田正夫

冬を凌いで來た樹々の如く、
わが心明るく大地に立つ。

樹々よ、綠よ、花の野よ、
光は空に流れ、

風ほがらかな四月、
喜はそこから湧出でて、
空に浮く白い雲となる。

立てよ、をゝしく、
我等は若く鮮かな樹々とならう。
光の大空を目ざして
伸びて行く大樹とならう。
苦しみ惱む大地から
高く〳〵輝く大空へ。
見よ、我等の青春は

大地に根を張つて
希望の行手に出發するのだ。

三　天の逆鉾

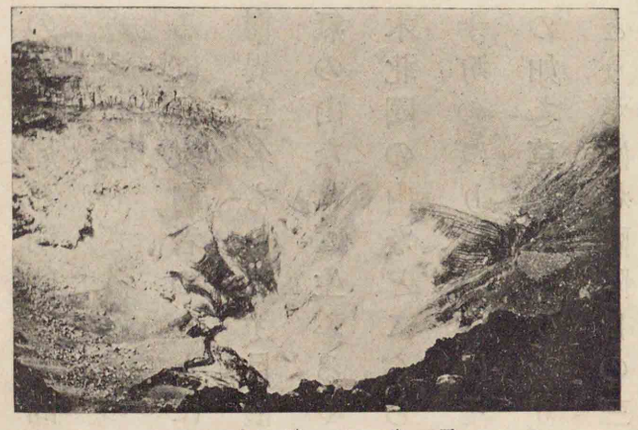
諸冊二柱　伊弉諾尊・伊弉冊尊の二神。

霧島山　宮崎縣、鹿兒島縣に跨る火山。

むかしあめつち未だひらけざりし時、諸冊二柱の御神、天の浮橋の上より霧のうみを眺め下し給ふに、島のごとくに見ゆるものあり。二柱の御神、天のぬぼこを以て是をさぐり見給ふに國なりければ、則ち此のところに跡を垂れ給ふ。是霧島山と名づくる由來にして、其の鉾を逆しまに下し給ひしが、今に至り其のまゝに此の山の絶頂にたちてあるを、天の逆鉾といふ。誠に神代の舊物にして奇絶の品、又外に

之を比すべきものなし。人々みな珍しと尊びて、拜せんことを希ふといへども、此の霧島山格別の高山にして、殊に火もえ、風動き、其の外種々の神變不思議怪異珍奇多く、登るもの不時に紛失する事など毎度の事ゆゑに、薩州の人といへども、恐れて絶頂に至る者すくなし。

予久しくこの逆鉾の事聞き居てゆかしく思ひ居つれば、鹿兒島逗留の時節、志を起して登らんとす。然るに山中奇怪多しと聞けば、召連れし僕などは凡庸のものなれば、もし恐れて紛失などせば惡しかるべしと思案して、旅宿へ集會の人の中にて選みしに、旅宿の近きあたりに年若き勇壯の男子ありて、「吾こそ其の山へ同道すべけれ。」といひしかば、則ち打連れてたゞ二人、霜月八日といふに薩州鹿兒島を立ちて日向國におもむく。薩隅日三州は嚴寒のときといへども、雪霜を知らぬといふほどの暖國なれば、かゝる高山へも霜月に登らばの近國にての大社なり。



霧島山噴火口

登らるゝことなり。

扨海陸二日路を經て霧島山に入り數十町登りて霧島の宮居の前に着く。二神垂跡の地なれば宮居今にいたり殊に美々しく、此ふし拜みて黄昏に及びぬれば、傍

の山下坊といふ坊に宿す。この坊にて、先達の案内者を宵の間に雇ひ明朝夜の間より登山す。雑樹生ひしげり、日かげだに洩らざるほどの山を、しかとしたる道すぢも見えざるに、只案内者のあとに從ひ、ひたのぼりに登る。その間、奇樹異草、名もしらず目慣れぬもの甚だ多し。これは南方暖氣の山なれば、生ふるくさの品類も多きなるべし。全體草木北國の山などにくらべて種類多し。かくの如き所を五十町のぼりつくせば、それより上は樹木一本もなし。只芝の如き草のみ生ひたり。其のところにいたれば、四方豁達とうちはれ、薩・隅・日の三州一望の中に入りて、衆山は波濤の如く、大海は青疊をしきたるがごとし。其の中に櫻島山兀然と秀でて、盆石をおきたるが如し。絶頂より白き煙四時に立ちのぼりて香爐の如く、景色無雙筆につくしがたし。

さて件の草ばかりの山をのぼる事又五十町、それより上は草もなく、只栗ほどの燒け石ばかりなり。こゝに至つて、登ります〳〵急峻なり。扨、このあたりより上、だん〳〵登るにしたがひ、天地の氣色やゝ變じ、不時に下の方より雨そそぎ來り、あるひは風よこさまに卷き來る。又眺望のいとまなし。それより二十町も登りて、馬の背越えといふところにいたる。また御鉢めぐりともいふ。此のところは登らず、たゞ平に行くといへども左右皆谷にて、劍の刄の上をゆくごとく、足の踏むところ纔に馬のせなか程なれば、馬の背

越えとはいふなり。足をはこべば、栗のごとくなる燒石左右の谷へなだれ落つ。其の行くところの狹きをしるべし。さて左の方は萬仞の谷にて、底は雲にて眼及ばず。右の谷は深さ三四町、あるひは五六町にて、谷にみちて猛火燃えあがる。此の馬の背越えにかゝりて後は、只何となく震動して、地軸只今くだけ折れて此の山微塵になるやうに覺ゆ。また腥きえもいはれぬ氣ふき來り、あるひは墨の如くなる雲うづまき來り、同行のものさへも一向にかくるゝ事もあり。あるひは前後左右に異形の雲煙あらはれ鬼神の如く神佛の如き事もあり。あるひは足下より虹たちのぼり、たて横にたなびきて、織りなせるが如くなる事もあり。又天

地ともに金色になる事もあり。其の外奇怪ふしぎ、なかなかいふもおろかなり。靜に是を考ふるに、是みな谷一面の猛火によりて、又陰氣もあつまり來り、火の上に雨そゝぎ雲霧覆ふが故に、水火相激して震動雷電し、又水火の薫蒸によりて種々の形みゆるなり。又硫黄焰硝の氣あるうへ、それに水をそゝぎたるゆゑ、種々の匂もいづる事なり。また折折一陣の風ふき來る事あり。此のときは先達教へて急にうつ俯に倒れ伏さしむ。匍匐にならざれば、風の爲に此の身をとられて猛火のうちに舞落つるなり。をりふしは風の爲に取らるゝものあるゆゑに、此の山にては紛失する人多しといふなり。予も殊に此のかぜを恐れて、少しの風に

も急にうつぶしになり、地に取りつきて風に放たれざるやうにせり。しばしにて又忽ちに風もやみ天はるゝこともあるなり。須臾の變幻定りある事なし。此の所に取りかかりしより、さしも勇氣の若者大いに恐れ、足戰きて立つこと能はず。我と先達も前後より介抱して、いろ〳〵と恥ぢしめ勵まし、しばしがほどは引行きしかど、後には目見えず顏色變ぜしかば、いかんともしがたく、ほとんど難儀に及びしに、先達いふやう、「けふは山も格別に荒し。殊にかゝる人引具し行かんことといかにも叶ふべからず。登山も是までなり。これより下山すべし。」といへば、力及ばず、本意なくそれより下りに向ふ。

扨、夫より纔に十町ばかりを下れば、天氣晴朗にして風おもむろに、四方の眺望初の如し。しばらく休息して燒飯など食し、こゝろを鎭めしかば、若者もけしき常の如くにして、さきにはいかにしてかばかりは恐ろしかりつるにやと、三人打笑ふ程なり。われつら〳〵おもふに、かゝる事のありて妨にもなるべからんかとて、凡庸の人を同道せざりしなり。然るに今若者が爲に予までも絕頂をきはめずして、是より下山せんこと生涯の遺恨なるべし。何とぞして一人なりとも登りたきものをと思ひめぐらして、先達に「これより絕頂までは道程いかほどある。」と問ふに、「馬の背越えの長さ八町、それを過ぎて急に登るところ十町ばかりもやあら

ん。」といふ。「それならばわづかの道なり。まぎれ道やある。」と問ふに、「兩方谷なればまぎるべき道なし。」と言ふ。「さらばあまり殘念なれば、予は獨歩して絶頂に登るべし。此のところに若者を守り居て、われが下り來るを待ちくれよ。」といひすてて、とゞむるをもきかで、のぼりしに件の馬の背越えに至れば、天地たちまち變じて初の如し。先達がをしへに任せ、折々はうつぶしになりて、風をさけ、千辛萬苦して馬の背越え八町が間走りぬけたるに、先達がいひし如く、それよりは眞直に登る所あり。此の處にいたれば、天地又常の如くにして奇怪なし。只息を限りに登る程につひに絶頂にいたれり。絶頂は尖りて僅の地面に天の逆鉾あり。是を見得しときのうれしさ何にかたとへん。逆鉾のありさま、全體は唐金の如くに見えたれども、風霜にさらせるものなれば、青く錆びてしかと知れがたし。長さ一丈餘ばかり、太さ大なる竹ほどにて、さかさまに地中にたち、其の石突の端の所に南面に鬼面の如きもの見ゆ。是も雨霜にさらされて鼻目しかとは見えがたし。土中に入りたる先の方は、何程深く入りたるか知るべからず。絶頂は只此の鉾一本のみにて、外に堂宇などの如きもの一つもなし。神代の舊物なりや、其の程はしらずといへども、實に三百年・五百年位の近きものとは見えず。天下の奇品なり。もし銘なども有るかとくはしく見しかど見えず。しばらく此の絶頂に徘

徊するに大氣晴明にして、四方目の及ぶ限りみえ渡り、其の心地よきこと今に忘れがたし。されども、かゝる所は久しく留るべきにあらざれば、急ぎ下りたるに、馬の背越えにいたれば、又はじめの如く天地晦冥して、怪異ます〳〵甚し。悉く筆に盡すべきにあらず。殊に山上の有樣は人間に洩さざる山法なり。恙なく馬の背越えをこえてひた下りに下るに、遙の下に先達・若者かすかに見えて大いさ豆の如し。嬉しくて急ぐ程に、下るとはなしにすべり落ちて、須臾の間に二人の前に着きぬ。恙なかりし事のみともに悅び、其の夜くれ過ぐる頃、宮居の坊にかへりぬ。（西遊記）

西遊記　橘南谿の著。全五卷、南谿が山陽・九州・四國に遊歷して得た奇觀異聞を集錄した書。南谿は伊勢（三重縣）の人、文化二年歿、年五十三。

四　純なる心

六歲になる子供は傷ましくも大患の床に横たはつてゐた。母親の眞心こめた必死の看護も效なく、死の恐ろしい冷い手は既にその身邊間近く迫つてゐた。枕頭の藥瓶や檢溫器を載せた盆の側には、人形や繪雜誌などが空しく轉がつてゐた。

やせ細つた手を握つて脈を見てゐた醫者の顏には、明らかに憂愁の色が浮かんでゐた。看護婦は靜かに醫者の顏を見まもつて、何かの指圖を待つてゐた。母親が涙の顏を子供の上にさし寄せた時、臨終を待ち設けられた子供の血

の氣の失せた唇が動くと見ると、突然低くはあつたが頗る明らかな聲が、

「お母あさまは泥棒をしたのね。」

と人々の耳に響いた。

これはまた意外千萬の言葉であつた。併し醫者も看護婦も、子供の刻々に迫る臨終に心を取られてゐた際ではあるし、又熱や衰弱に意識の朦朧とした病人の囈語には慣れてもゐるし、さして氣にもとめなかつたらしい。我が子の生命の心配で胸一杯になつてゐたのであるから、母親ですら、まあこの子は何を感違ひをしてゐるのだらう位にしか思はなかつた。

それでも、似合はしからぬ臨終の言葉が、子供の死んだ後悲しさと忙しさの中にも、母親はその頭の一隅に殘つてゐるのをおぼえた。葬式も濟んで、ほつと一息つくと共に愛兒の思出が一入身にしむやうになつた時、ふと思ひついたことがあつて、母親ははつと頭上に冷水を灌がれたやうに、又いきなり背中をどやされたやうに覺えて、涙が一時に堰を切つたやうに流れた。

思ひ出せば去年の或日のことであつた。出入の八百屋が葡萄を持つて來たことがあつた。少しばかり買つた後で、母親は價が少し高いやうに思つたので、一房だけまけて貰ふつもりで、

「これ一つ取るわよ。」

といつて、一房餘分に取つた。それを傍で見てゐた子供は心配さうに、

「お母さん、とつてもいゝの、とつてもいゝの。」

といつたが、母親は何の氣もつかずに

「あゝ、いゝよ。」

といつて、そのまゝになつてしまつてゐたことを思出した。

「とつてもいゝの、とつてもいゝの。」と心配げに訊いた言葉の意味が「盗つてよいか。」といふ詰問の意であつたことに、今始めて氣づいたのであつた。

それから約一年の間、子供はその純なる精神の底に、この恐ろしい疑問を抱いて、絶えず我を詰つてゐたのであるかと、母親は今更ながら深く〳〵その不注意・不謹慎を悔いた。

（東京朝日新聞に依る）

伊東忠太
慶應三年山形縣米澤市に生る。工學博士、建築學者、東京帝國大學名譽教授。

五　日本の風光

伊東忠太

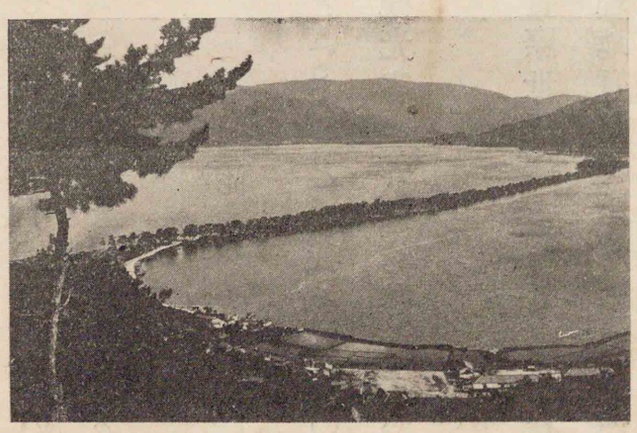
日本は風光明媚な國であるといふことは、我々國民のお國自慢ばかりでなく、また外國觀光客の外交的辭令ばかりでもない。

日本の如く風景に富む國は、實際世界にあまり多くない。ただその規模の小さいのは、地理・地質によるもので、遺憾としなければならぬ。

何時からいはれた事か知らぬが、安藝の宮島、丹後の天の橋立、陸前の松島を日本三景と稱する。併しこの三つが果して日本最美の風景であらうか。

勿論風景の美をはかる尺度はなく、見る人の主觀次第で批判されるのであるから、どこの景色が絶對に最優であるとは定め難いが、この三景以上の景色は決して少くないと思ふ。

この三景の選拔法は恐らく日本本州を、中央・西部・東部の三



天の橋立

浦々　杉野浦、腰細浦、青海苔浦、山白浦、洲屋浦、御床浦、網浦。

區に分けて、各區に一ヶ所づつ特色のある景を選んだものであらう。即ち近畿地方で天の橋立、中國で宮島、東國で松島を選んだのであらう。或は又海洋の方面から見て、日本海で橋立、瀬戸内海で宮島、太平洋で松島を選んだものであるかも知れない。畢竟三景は地方代表的のものである。

予の觀る所では、日本三景の中で、安藝の宮島が第一である。廻れば七里の浦々の中で、

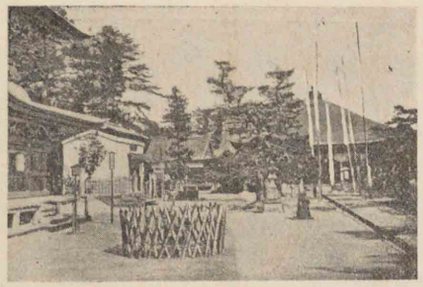
島神社廻廊

嚴島神社
官幣中社、推古天皇の御代に始めて造營せられ後數度の改築を經て現在に至る。祭神は宗像三神外三神。

彌山
嚴島神社後方の山。

智恩寺
吉津村大字文殊の海濱(切戸)に在る、文殊堂ともいふ。

嚴島神社と彌山を海上から眺めたところが壓卷である。併し瀨戸内海には、單に山と水との關係から見れば、その規模布置・色調等に於て、宮島にまさるとも劣らぬ所は決して少くない。ただ神社をその間に點じて風景を引締めた點に於て、恐らく宮島に及ぶものはなからう。』


切戸の文殊

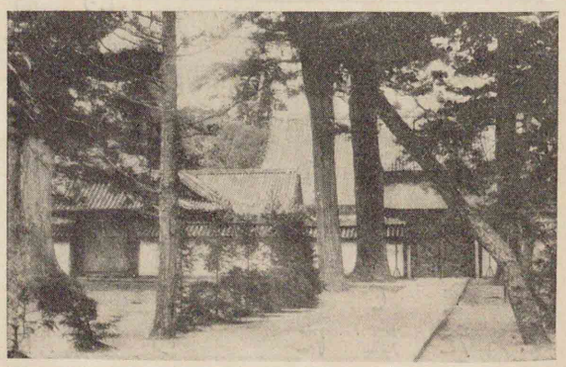
日本海の沿岸は概ね平板で奇巧なる風景は少い。この間に於ては、橋立はその選に入るべき資格は十分あらう。橋立の智恩寺に於けるは宮島の嚴島神社に於けるが如き重大の意味はないが、なほ丹後の國道に當り、橋立の行路を扼

富山
瑞巖寺の東北にある山。

瑞巖寺
松島村に在る。淳和天皇の御代圓仁の創立。今は臨濟宗で青龍山と號する。

し、橋立と併存して離るべからざる關係にある。即ち自然の風景に人工の美を點ずるものと解することが出來る。松島の景色は海と島とを取混ぜて平面的な景色である。

松島の全景は富山の頂から展望しなければ分らぬ。景色がやゝ散漫で中心がなく、從つてその印象は淺く弱く、宮島ほどの深さと強さはないと思ふ。松島の景色に點ぜられた人工の景物は瑞巖寺である。寺は松島によつて名高く、松島は寺によつて名高いのである。日本三景


瑞巖寺

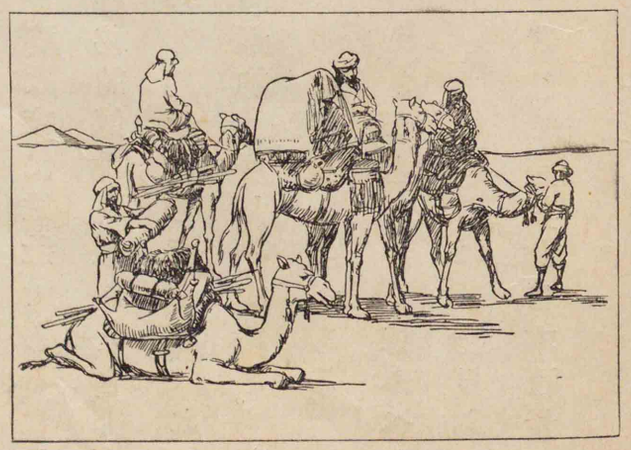
は何れも海を取り入れた景色であつて、三者各、その趣を異にするとはいへ、畢竟同一種類である。

若し自然の構圖が極めて巧妙に出來てゐたら、これに人文的素因を點ずるに及ばず、又點ずる餘地もない。併し普通の場合には、やはり何等かの人文的要素の點出によつて風景が引締められるものである。尤もそれが餘りに多ければ、却つて風景を俗化させ、または庭園化させる。例

石山寺

近江八景
比良の暮雪、矢走の歸帆、石山の秋月、瀨田の夕照、三井の晩鐘、堅田の落雁、粟津の青嵐、唐崎の夜雨。

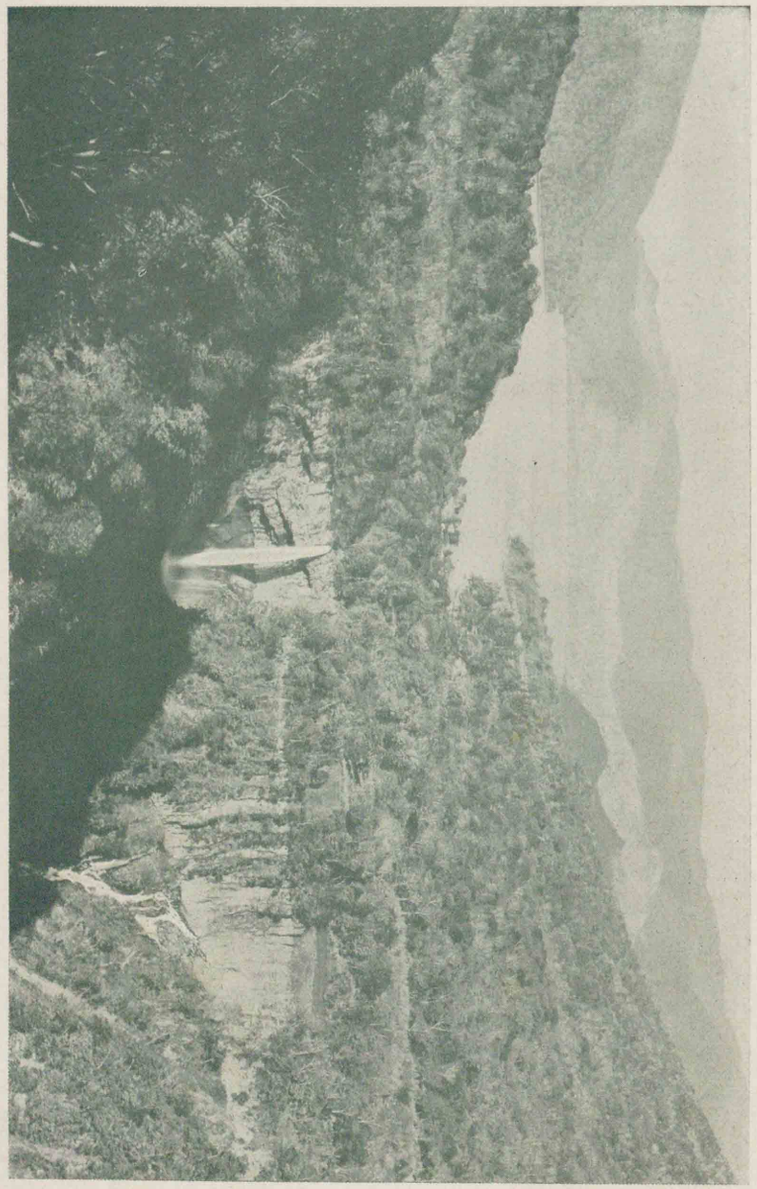
へば近江八景の中に、石山の秋月を數へてゐるが、月だけでは景にならぬ。石山寺がその人文的素因となつて始めて美しい。絶大なる自然の構圖でも、餘りに絶大では風景にならぬ場合がある。この時人文的素因を投じて中心點を作れば始めて風景になり得る。例へば、一眸千里の沙漠は、風景としては寧ろ索漠たるものであるが、そこにはるかに一群の駱駝の列が點出されるとき、好個



商隊

の畫面となる。若し駱駝の鈴の音が、風につれて斷續して聞えるならば更に幽情を深からしめるであらう。又例へば萬仞の峻嶺が雲を破つて峙つ姿は實に雄壯である。しかしこの山岳に伴ふ何等かの神祕的傳說を想ふとき、非情の土石も、有情の靈山として觀客を魅するのである。この場合は、無形の精神的人文的素因が加はつたのである。舊日本三景はこの點から見て意味の深長なものがある。近江八景には小細工を弄した點もあるが、とにかく味ふべき所がある。新日本八景には、美しいものもあれば物足らぬものもある。今後大いに考慮を費して、完美な日本百景を選みたいものである。（木片集）

新日本八景
華嚴瀧、十和田湖、雲仙岳、上高地溪谷、別府溫泉、狩勝峠、木曾川、室戸岬。



華嚴瀧　嚴

五十嵐力
明治七年山形縣米澤市に生る、文學博士、國文學者、早稲田大學教授。

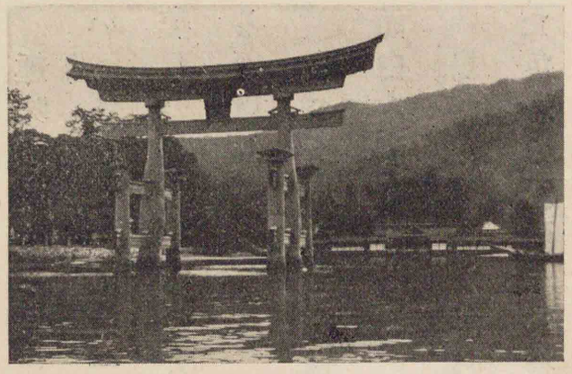
六　趣味の嚴島

五十嵐　力

趣味の眼から見た嚴島の中心の味ひはどこにあるかといへば、私たちは第一に彌山を背景として立つた低い廣い美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めたところにあると思ふ。

まづ藝州本土の對岸から船を傭うて、ギイ〳〵と艪の音面白く漕いで出る。青一色で塗り潰したやうな恰好のよい島だと思ひながら漕いで行くと、その一色の中から違つた色彩の社殿や堂塔が、次第に著しく浮出てくる。初には木片を立てたやうに見えた鳥居が、だん〳〵と大きさを加

へてくる。また漕ぐほどに、鳥居も、社殿・堂塔も、益〻大きさ鮮かさを加へてくる。その中に次第に進んで大鳥居の下にくると、私たちは覺えず驚きの目を見はるであらう。見よ、目の前には高さ九間、棟の長さ十三間、地軸とも天柱ともいふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨つてゐるではないか。向ふを見ると、青雲に聳えた彌山の麓に、二十幾棟の社殿が美しく左右に延びて、赤い柱に緩やかに反つた檜皮葺の神々しい姿を、水面に映してゐるではないか。そ

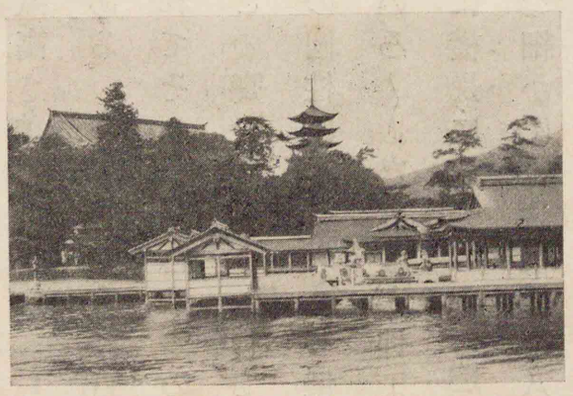


嚴島神社大鳥居

の色彩を見よ、形狀を見よ、一つ一つの建物の整つた姿を見よ、多くの建物が廻廊や橋に繫がれて、美しい釣合を表してゐるのを見よ。何といふ美しさ・氣高さ・神々しさであらう。

社殿の中心たる本社は寶殿である。寶殿の左右に百二十七間といふ長い廊下が繞らされて、その間に百八つの神さびた鐵の燈籠が吊してある。この寶殿を中心として、檜皮葺や瓦棟の多くの建物が朱塗の圓柱に支へられて低く美しく並んでゐる趣。縱向・横向、いろ〳〵な社殿が仲よく馴染んで、大鳥が翼を廣げたやうに横長に建つてゐる趣。更に晝は鮮かな色と美しい形とを細かに見せ、夜は百八の燈火――白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥し

い數に上る燈火――を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚長のすくやかな姿を見せ、滿潮には波の上にうかんだ龍宮城の幻のやうな光景を見せる趣。　これ等のすべてが、何ともいはれぬ調和をなして、綠の山と白波の海との間に鎭まつてゐる趣。高さ・大きさ・もの〳〵しさ・荒々しさは、前後の護衞者たる山や、海や、鳥居に讓つて、社殿自らは、千木も、堅魚木も、しびも、しやちほこもない尋常な檜皮葺を朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横たへてゐる趣。　この重疊累積した美しさ・ゆかしさを、何に譬へようか。



嚴島神社と五重塔

横山桐郎
明治二十七年東京に生る、農學博士、農林省蠶業試驗所技師。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんなことを考へる。設計者の鬼神は、海底でできあがつた龍宮城を、嚴島のあの入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。　靜かにせり上るのを凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計らつて、ここだといふ所で、ぴたりとせり上げを中止させたであらう。　そしてこれを眺める恰好な立脚點を、今の大鳥居の位置に定めたのであらうと。（甲鳥園隨筆）

七　蟲出づる頃

横山桐郎

寒い風が温く、暖い日光が強く白くなると、自然に春の野外劇の準備が忙しくなる。

春空に囀る雲雀の歌と、日向の草土手に氣兼ねらしく咲くサギゴケやイヌノフグリの花にすがりついてゐる小虻の合唱に、野外劇の幕は開かれる。

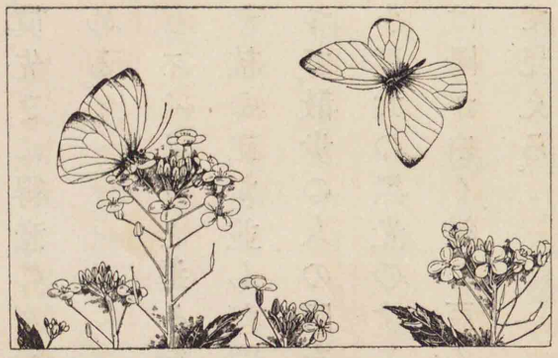
それは年々同じ藝題を繰返すのだが、昔から今日まで忠臣藏が少しも廢らないやうに、幾度繰返されても、少しも興味が減ることなく、いつも湧くやうな人氣である。

無論その規模、演出の技巧、將又綿密さに於て、自然の野外劇は人間のそれとは比較にならぬ程優れてゐる。

何時何處から生れ出たかと思はれる、白地に黒い紋付の

忠臣藏　假名手本忠臣藏。淨瑠璃の名作。竹田出雲等の作。

翅を持つた中形の蝶々が、さも樂しげにヒラ〳〵と、或は大根の花を求め、或は蜜を求め、或は鬼ごつこをして花の間を飛び廻つてゐる。野外劇の序幕は、この白蝶の舞踊に始まると言つてよからう。



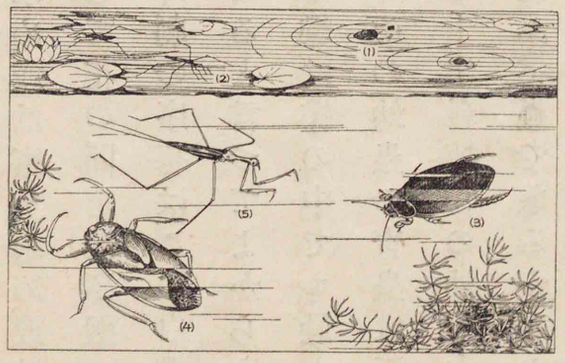
白蝶

しかし白蝶は蝶の中でも、最も平凡のもので、その幼蟲の青蟲は、吾々の栽培する十字科植物の油菜・大根等の葉を食ふ害蟲であるが、春のおとづれを告げる第一の使者として、私はこの蝶に敬意を拂ふものである。

冬の間は全く休業してゐた畔の小溝が春の讃歌を合唱し始めると、それに伴はれて蟲界の名ダンサー、水スマシは、眞先きに得意のダンスを舞ひ始める。

スイ〳〵と進み行く流の上、葦や杭の立ち並んだ間に妙技を振つて、散歩の人の眼をひき止める。小豆大の黑光のする身體の背には陽が白く、銀の豆のやうに光つて見える。

彼等は、流に逆らひながら、さも身輕に水の面をクル〳〵



ウラゴンゲ(3)　ウボンメア(2)　シマス水(1)
リキマカ水(5)　メガタ(4)

と渦を卷いて走る。そして人の足音や、一寸物音がすると、眼にも留らぬ速さで廻り始め更にひどく驚くと、ダンスをやめてあわてて水の中に潜つて行く。

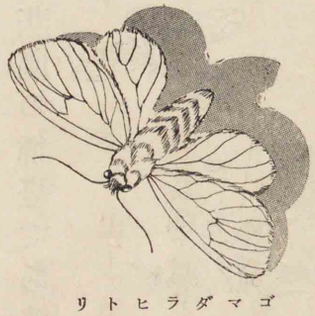
そして水底の木片や小石の下に潜り込んで暫くぢつと樣子をうかがひ、もう大丈夫と思ふと又ついと水面に出て、ダンスを續ける。その敏捷な妙技は蟲界第一である。水面を走ることでは、アメンボウも一廉のチヤンには相違ないが、その技は水スマシに比べてはお話にならない。

尙水の中には、へうきんな體つきをしたゲンゴラウ、山賊のやうな面構へに、大鎌みたいな二本の前脚を擴げて泳ぐタガメ、まるで棒切れの樣な野暮な色と恰好をした水カマ

キリ等、何れも劣らぬ水中の追剝・辻強盗連が、互に牙を鳴らして睨み合つてゐる。

長い冬眠から覺めた蜜蜂は、朝早くから花を訪ね、蜜と花粉とを集めて子孫を養ふべく奮闘を始め、熊蜂の雌は隱れ家を出て新しい家庭の建設に取りかゝる。花蜂はくさむらに野鼠の巣を探して、おのが巣を營むべく活動を始め、大工蜂は枯杭に穴をほつて子供の養育室を建て、壁屋蜂は泥を含んでこれ又育兒室を造る。

庭石の傍では小蟻がせつせと細い土塊をくはへ出して巣を造り始める。皆子孫のためにいそ〳〵として働いてゐる。



ゴマダラヒトリ

梅の若芽伸び、桃の花が散つて、青い芽が顔を出して暫くすると、鮮かな綠が、いつしか灰色の網で包まれてしまふことがある。見ると三分程の水色のいやらしい毛虫が、うじや〳〵と群つてゐる。

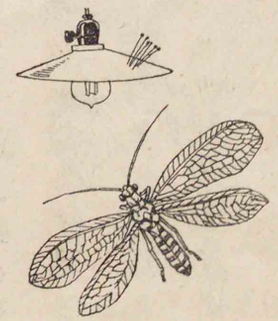
又裏庭に生えた蕗の葉が食ひ荒されてゐることもある。前者はオビカレハ、後者はゴマダラヒトリといふ蛾の幼虫の仕業である。

草花の莖にはアブラ虫が盛んに子を產む。その間を黑蟻が徘徊して、アブラ虫から蜜を貰ひ、代

アブラ虫

償として無力のアブラ虫を保護する。さうした蟻の警戒の裏をくぐつて、草カゲロフやヒラタアブの幼虫はまたこのアブラ虫を食つて歩く。

ヒラタアブ



草カゲロフ

春の樂園も、裏をのぞいて見ると、恐ろしい生存競爭の大悲劇の舞臺である。生きる者、死ぬ者、食ふ者、食はれる者、それらの者が各、生命を全うし、子孫の繁殖を計るべく奮鬪努力する樣は、虫ながら實に敬服に値する。

路傍に庭園に蠢々として動く、無心

に見える小蟻の一擧一動にも、深い思慮と大きな意味が含まれてをり、花に寄り添ふ胡蝶の舞も、單純な悅樂ではない。生物界の生存競爭の大活劇は、先づ陽春三四月に幕を切つて落し、細い虫と虫、虫と植物の爭鬪に始まり、やがて幾千幾万の虫は續々と舞臺に現れ、各、得意の演技をなす。

その千態萬樣、十人十色の妙技の表現は、正に他の生物界に見られない興味がある。虫の研究それは詰らぬ仕事のやうだが、その底に潛む尊い教訓、深刻な諷刺は、假名手本忠臣藏以上に吾々の興味をそゝる。

私は多くの人が虫にもう少し同情と理解とを持ち、虫を研究する人達に、今少し尊敬を持つてほしいと思ふ。日本

の昆蟲學は餘りに貧弱であり、昆蟲學者は餘りに輕視されてゐる。（蟲の世界を探ねて）

八　紅椿

三木露風

三木露風
名は操、兵庫縣の人、明治二十二年生、詩人。

山越えて來たふるさとの
家の籬に、ただ一つ
紅い椿が咲いてゐる。

あゝ、紅椿、紅椿、
ありし昔をそのまゝに
夢ともならで咲く花よ。

昨日吹いた西風は
遠い響となつて消え、
けふ麗かな海の町。

あゝ、西風のやんだやう
我が悲みも過去つて、
ひとりしみじみ海を見る。

ふるさとの、ふるさとの
家の籬の紅椿、

その葉を越して
海を見る。

（青き樹かげ）

九　豐臣太閤

三上參次
慶應元年兵庫縣に生る、文學博士、國史學者、臨時帝室編修官長、東京帝國大學名譽教授。

從來豐臣太閤の人物事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記・繪本太閤記等なり。此等の書は、三國志・漢楚軍談などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、又講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書は、武邊の偉人としての太閤をのみ描きて其の他の方面は殆ど全く閑却したるが如く、まゝいみじき誤謬をさへ傳へたり。太閤を無學文盲の

人と傳へたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。

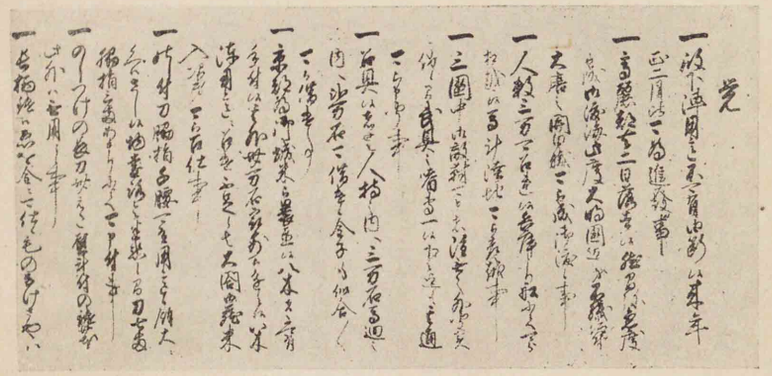
珠は磨けば益〻光り、鐵は鑽れば彌〻堅し。眞に偉大なる人物は仔細に研究するに從ひて一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一面にては雄才大略の人なりしと共に、又一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑〻太閤は一代の事蹟頗る多く事業の規模甚だ大なり。故に舊大名たりし華族の諸家・古社寺・舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾千なるを知らず。公の祐筆たりし太田和泉守牛一・大村法橋由己等の文章家の手に成りたると思しき、雄健にして生氣に富める文書其の大部分を占めたりとはいへ、確に太閤の自筆なる色紙・短册・消息の

類も亦少しとせず。西に東に遠征せる先きより、母なる大政所、夫人なる淺野氏若しくは秀賴等に贈りたる書狀の如きは、親子・夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉・秀潤等の讃美の辭を加ふることこそ敢へてする能はざれど、頗る圓熟したるものにして、その中自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。」漢字もまた用ひられたるが、其の崩し方も無下に卑しからず、嘗て習字せしことの無き人には、決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に太閤の祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、とみには思ひ出でざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは太閤の簡易を喜び、敏捷を尚びしをいへるにて、少しも漢字を知らざりしをいへるには非ず。

江村專齋　名は宗具、倚松庵とも號す、京都の醫師、寛文四年歿。

老人雜話　二卷、專齋の雜談を其の孫宗恕が筆記した書。

軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、字句の鍛錬なしといへども、天眞爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滯する所なし。而して、その間に溢るゝばかりの愛情あらはれ、趣味の津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年小田原在陣の中



秀吉の書翰（その一）

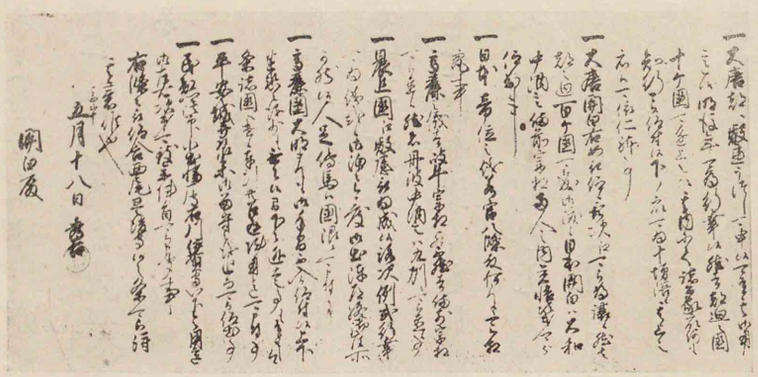
・小田原在陣　秀吉自ら北條氏政を小田原城に攻めた。

秀吉の書翰（その二）

に母なる大政所へ上りし書中に、そもじさまは御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わかく御なり候て可給候。たのみ申候。」の語あり。千言萬語を費すとも、子の親に對する愛情は此の「若くなり給はれ。」の一語より適切なるものはあらじ。又その夫人淺野氏の書中には「ねんごろに文給はり、御げんざんのこゝろしてねんごろにみり〳〵。ことし内にはひまあけ可參候。心安く候べく候。かならずとし内に參り候て御目にかゝり、つもる御物がたり可申候。」等の句あるなり。祐筆の手に成りたる文書の中にも、かしこゝに太閤の口授に係れりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも古文書の上より觀察す

撥亂反正

撥亂世一反二諸正一莫レ近二於春秋一。（公羊傳）



秀吉の書翰（その三）

るときは、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり。將卒に對しては最も慈悲の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。

さて太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十八日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛りと咲亂れたるを愛でて、其の下に徘徊せり。後陽成帝遙に之をみそなはしてにや、畏くも敕使を遣はし花の折枝に一首の御製を添へて下し賜ひしかば、太閤感佩に堪へず、卽ち

忍びつゝ霞とともにながめしも、
　あらはれけりな、花の木のもと。

と返歌を上られき。又十六年の事なりけり、北山に狩して

北山　京都府葛野郡衣笠村大字北山。

龍安寺　京都府葛野郡花園村に在る、臨濟宗。

藏王堂　藏王權現堂ともいふ。金峯山寺の本堂、役行者の開基、天正年中秀吉が修造した。

龍安寺に憩へることありき。頃しも春の最中なりけるに、庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却て淡雪のちら〳〵と降り來りしかば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は、
　花をおそしとさそひ來ぬらん。

と詠まれき。感興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、

吉野山たれとむるとはなけれども、
　今宵も花のかげにやどらん。

と詠じ、藏王堂にては、

歸らじとおもふ家路を入相の

紀州征伐　天正十三年に根來寺を伐つた。
名護屋　佐賀縣東松浦郡名護屋村、秀吉征韓の砌、此の地に城を築いて大本營とした。
聚樂第　京都に於ける秀吉の邸宅、天正十二年に成る。
横槊賦詩　曹氏父子鞍馬ノ間ニ爲レ文。往々横レ槊賦レ詩。（舊唐書）

かねこそ花の恨なりけれ

と歌はれたり。巧を弄ばずしてなか〳〵に雅趣に富み、格調も亦平凡ならずして、古の撰集の中にも置きたき心地せらる。

此の他、紀州征伐の時には和歌浦・玉津島にて、小田原陣のをりには清見潟にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての詠歌も少からず。天正十六年の聚樂第行幸のときは勿論醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては大宮人の昔を偲ばしめ又時としては古英雄の横槊賦詩の面影を想はしむ。而して功成り名遂げたる此の千古の偉人も、亦無常を感じたる事のありてにや、

伊達政宗　幼名は梵天丸、秀吉に屬した。
細川忠興　幼名與一郎、剃髪して宗立といひ、三齋と號し、秀吉に仕へた。

露とちり雫ときゆる世の中に、
　何とのこれる心なるらん。

と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらるゝや、あはれにも、

露とおき露と消えにし我が身かな、
　なにはのことは夢のまた夢。

といふ辭世の短冊をとどめられき。げに太閤は伊達政宗・細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうちの錚々たる者なりしなり。

確に太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短冊にして、予が原本を目擊したるもののみにても、二三十はあるなら

ん。加之、太閤は、時には學者をして往事を談ぜしめて之を聽き、又禪學の書の講義をも聽きたりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は決して無學文盲ならざりしなり。

（豐太閤に關する研究）

薄田泣菫

岡山縣の人。明治十年生、名は淳介、詩人。

一〇　蟹

薄田泣菫

雨の晴れ間を野路へ出てみた。

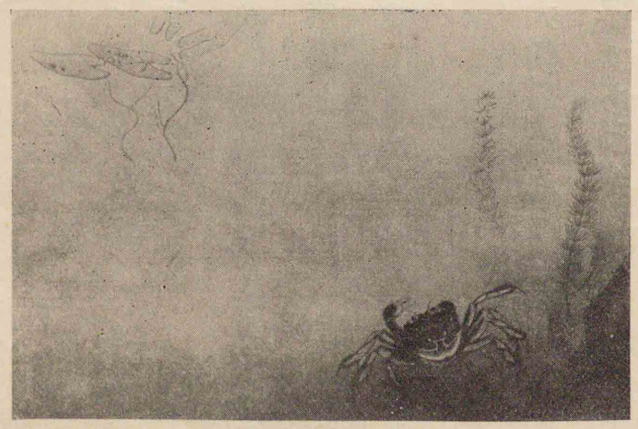
づぶ濡れになつた石のかげから、蟹が一つひよつこりと顔を出してゐた。

「いよう。蟹か。暫くぶりだつたな。」

私はさう思つて微笑した。それが春になつて始めて見る蟹だつたことは、私がよく知つてゐた。

暫く立ちとどまつて見てゐると、蟹は石の下からのこ〳〵這ひ出して來た。そして爪立するやうな脚どりで水溜りを渉り、髮を洗ふ女のやうに頭を水に突つ伏してゐる雜草の背を踏んで、少し高めになつてゐる芝土の上へあがつて來た。

ふと何かを見つけた蟹は、慌てて芝土に力足を蹈みしめ、黑みがかつた綠色の甲らがそつ



蟹　（下村觀山筆）

くりかへるばかりに、二つの眞赤な大鋏を頭の上に振りかざしてゐる。

怒りつぽい蟹は、一歩巣から外へ踏み出したかと思ふと、ぢきにもう自分の敵を見つけてゐるのだ。

彼は傍に立つてゐる私を、好意のある自分の友達とも知らないで、その姿に早くも不安と焦燥とを感じ出し持前の喧嘩好きな性分から急に赫となつて、私に脅迫を試みてゐるのだ。

萬力を思はせるやうな眞赤な大鋏。それはどんな強い敵をも威しつけるのに十分な武器であつた。

そんな恐ろしい武器を揮つて、敵を脅かすことに馴れた蟹は、持前の怒りつぽい、短氣な性分から、絶えず自分の周圍に敵を作り、絶えずそれがために焦立つてゐるのではなからうか。

その氣持は私にもよく分る。すべての人間の魂の物陰には、蟹が一匹づつかくれてゐて、それが皆赤い爪を持つてゐるのだ。

私がこんなことを思つてゐると、蟹は横柄な足どりで、横這ひに草のなかに姿を隠してしまつた。（卿木蟲魚）

一一　國史に返れ

徳富蘇峰

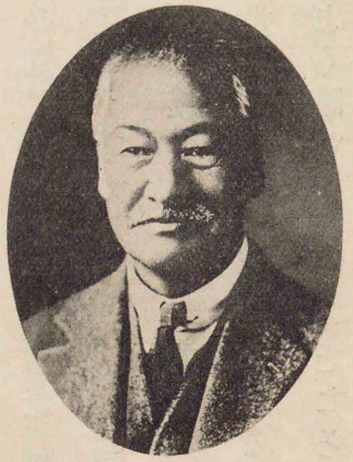
「國史に返れ。」日本國の歴史は大和民族の系圖である、吾

徳富蘇峰　名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年生、貴族院議員、東京日日新聞社社賓。

人が祖先の功科表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには國史を透して知るより他に方便がない。國史は實に忠實な案内者である、信頼すべき指導者である。

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は平等觀よりすれば皆同胞である。しかし、歴史觀よりすればすべての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、而して丙國と甲國とも また同じでない。十箇國あれば十箇國の相違があり、百國あれば百國の差異がある。この特殊の國性を維持する上に於て、始めて獨立國の意義が完うされる。獨立國の本義

は形式的に他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない精神的に自主であらねばならぬ。詳にいへば、精神的にその國性を把持し保存し、開展し、發達させねばならぬ。


蘇富德峰

我が大和民族の誇は日本の歴史である。この歴史の中には、必ずしも悉く皆正しいこと善いことのみが滿ちてはゐない、必ずしも悉く敬ふべく仰ぐべきことのみが溢れてはゐない。人間は決して神様ではない。我が日本人の所作にもさまざまな過失もあれば、罪惡もある。しかし、總括していへば、日本の歴史は決して大

和民族の耻辱史でなく、光榮史である。

いかに日本の皇室が世界に比類のない有難い皇室であるかは、國史が最も雄辯にこれを語つてゐる。いかに日本の國民がその一旦緩急の際に處して、護國の精神に猛烈に且つ勇敢であつたかは、國史がその證人である。いかに大和民族の中に世界的偉人と比較して一歩も劣らぬ者、即ち世界的偉人と稱せられるに足るものを生じたかは、國史をよく讀む人の知るところである。即ち我が明治天皇の如きもその盛德大業は、國史の背景によつて始めて明白に精詳に、剴切にこれを會得することができる。國史の背景がなかつたならば、五個條の御誓文の如きも、一種の雄快な文書たるに止るだらうし、帝國憲法の如きも、單に乾燥無味な一部の法文に止るであらう。

凡そ固陋頑冥な戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若しくは詭激狂妄な赤化主義や、架空浮誇の摸倣精神や、いづれも我が國史を閑却するからして起るのである。現狀を株守するのも國史を知らないが爲、現狀に不安を感ずるのも國史を知らないが爲、國民的自信力を失墜するのも國史を知らないが爲、自惚根性で醉生夢死するのも國史を知らないが爲ではないか。

「國史に返れ。」とは、すべての國民が歴史家となれといふのではない。それには專門の學者がある。ただ日本國民と

して日本の歴史のその大いなる筋道を諒解せよといふのである。この歴史は日本の精神の潜在して居る寶藏である。苟も國民的に生活し且つ活動しようとするならば、まづこの寶藏に向つてすべてのものを求めるがよい。」

（國民小訓）

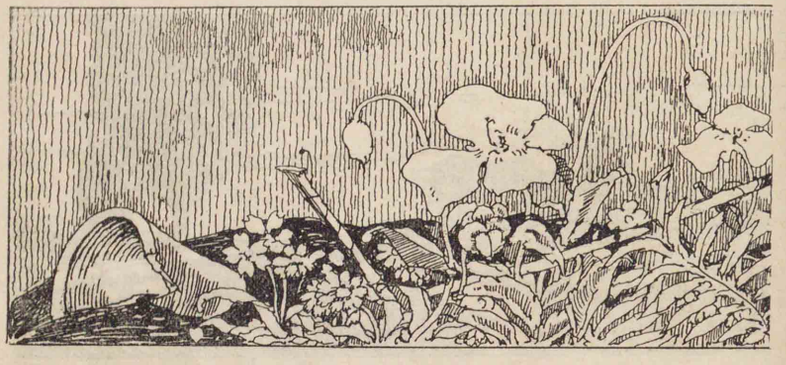
竹友藻風
大阪の人、明治二十四年生れ、名は甫雄、英文學者にして詩人東京高等師範學校教授。

一三　初夏

竹友藻風

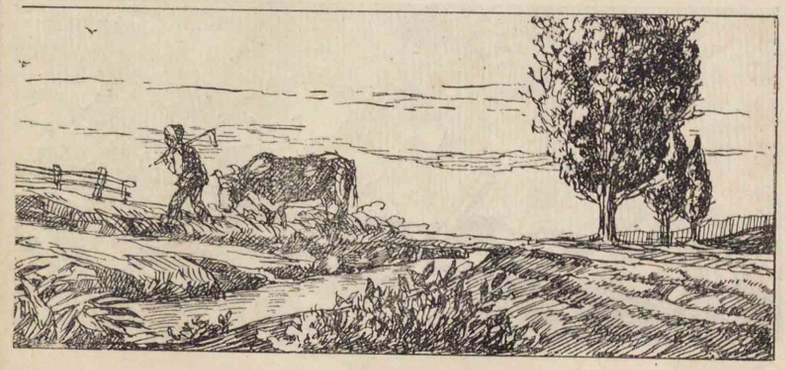
一　けむる草葉

けむる草葉よ、けむる草葉よ、
ふりそゝぐ雨の中にも、ほそぼそと、
紅の灯をともす罌粟の花、



をとめ撫子・あらせいとう。
けむる草葉よ、けむる草葉よ、
廢れゆく園の垣根に生ひしげる
愁の蔓は丈伸びた
苺・晝顔・豆の花。
けむる草葉よ、けむる草葉よ、
さみだれの悲哀とこの夕ぐれの
しめやかな灯のかげのよろこびに、
眠れ、雛菊・えぞすみれ。

二　丘



丘はなだらかに迂曲つて、
森の木のひらけたところから
あかるい空の下まで、
ひとすぢの小徑を招く。
麓は一帶の低地、
その最も低いところに、
葭が生え小河の水が
ひそ〳〵と囁いてゐる。
小徑は丸木橋の上を通つて

五月二十六日
明治三十八年

あかるい空の下へ行く。
丘の裸の肩にもたれ、
小河の聲を聽きながら。

（竹友藻風詩集）

一三　日本海海戰

かくて五月二十六日の夜は過ぎて、愈〻世界の海戰史上に特筆大書せらるべき大海戰の日、五月二十七日の午前となつた。東方の水平線上に、一抹の彩雲が薄ぼんやりと、黎明の曙光を投げかけ初めた午前四時四十五分、突如一閃の飛電は、哨艦信濃丸から對馬海峽の曉靄を破つて全艦隊に「敵

片岡第三艦隊司令長官　片岡七郎、當時海軍中將。

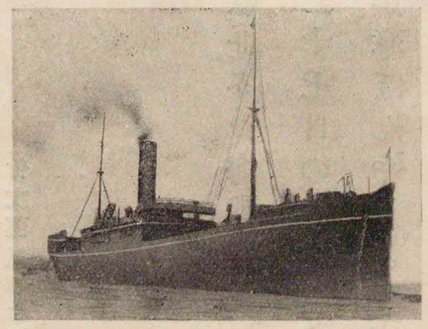
第五戰隊　第三艦隊に屬する。

沖の島　對馬の東南にある小島。

鎭海灣　朝鮮の南岸、馬山此の灣に臨む

艦見ゆ。」との警報を傳へた。

尾崎灣に在つた片岡第三艦隊司令長官は、之を東郷司令長官に轉電すると同時に、麾下艦艇に急速豫定の部署に就くべきを命じ、自ら、第五戰隊及び第十一・第十六・第十七・第十八・第二十艇隊及び白鷹を率ゐて、對馬東水道に向つた。東郷長官が「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出動、之を擊滅せむとす。本日天氣晴朗なれども波高し。」との名文を以て第一の報告を大本營に打電されつゝ、第一・第二艦隊を率ゐ、沖の島の北方を指して、鎭海灣を出動さ



信濃丸

れたのは、正に午前六時であつた。

見渡せば、大小の艦艇四十餘隻は檣頭高く大將旗を飜せる旗艦三笠に率ゐられ、威風堂々大海を壓し、濛々たる煤煙を天空にたなびかせつゝ、滿艦の將卒は躍り立つて甲板を踏むこと三度、勇躍して乾坤一擲の大舞臺に乘り出して行く。勇壯、形容すべき言葉もない。

哨艦よりの報告は相繼いでくる。軍艦和泉からは、敵艦隊の編制より陣形・針路・速力等に至るまで、巨細の狀況を遺憾なく報告してくる。敵は正に囊中の鼠である。

敵が對馬東水道を通過せんとするを知つた我が主力艦隊は、之を沖の島附近に邀擊するに決し、午後一時過ぎ同島

の北方に達し、敵航路の前方を扼して恰も勢子に追はれた兎の一群を待つが如くに、網を張つた狀況に占位した。午後一時十九分には、出羽司令官の率ゐる第三戰隊を南西微西に、幾ばくもなくして第五・第六戰隊を西方に認めた。

出羽司令官
出羽重遠、當時海軍中將。
第三戰隊
第一艦隊に屬する。

皇國興廢在此一戰各員一層奮勵努力
東郷書

東郷平八郎筆蹟

第五・六戰隊
第三艦隊に屬する。

午後一時三十九分、南西遙の水平線上には黃土色の煙突が、折柄の濛氣の中からズラリと竝んで見えはじめて來た。蜿蜒長蛇の如く、海面を蔽うて航進してくる有樣は、敵ながらも天晴れの武者振りである。幕僚を率ゐて、三笠の最上

艦橋に立たれた東郷長官の双眼鏡裡には、三笠の南西約七海里に、二列縱陣の敵艦隊が、右翼列の先頭にはボロヂノ型戰艦四隻より成る一隊を置き、左翼列にはオスラビヤ・シソイヴェリキー・ナワリン・ナヒーモフの四隻より成る一隊を先頭に位置せしめ、其の後方にはニコライ一世外三十隻の艦船が、數海里に亙り連綿として續航してくるのが映じ出された。

一時五十五分、三笠の檣頭に一旒の信號旗がスル〳〵と揭げられた。是ぞ有名なる

「皇國の興廢此の一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ。」

との信號である。然り、眞に皇國の興廢は此の一戰に在る

のである。兩艦隊の雌雄を一擧に決すべき所謂決戰である。皇國の存亡を賭する一六勝負である。我が艦隊にして敗れんか、東亞の海上權は敵手に落ちるのである。其の曉に於ては我が沿岸は敵の封鎖を受け、東洋の海面は、敵の勢力圏内に入るのであつて、朝鮮との交通も不可能となり、滿洲軍との連絡も斷たれるのである。國民生活の必需品を始め、諸産業の原料品に至るまで、海外からの輸入は一切杜絶するのである。我が海上の武力が衰へて、東洋の海上權を失つた場合に、國民が如何に地團太踏んでも及ぶものでない。これは、過去も現在も將來も、我が國民にとつては平戰兩時を通じて、決して忘るべからざる大問題である。

此の時此の際、全艦隊を率ゐて、此の大任に當つた東郷長官の胸中を推察する時、誰か一掬の涙なきを得るであらうか。全艦隊の將卒は此の信號を仰ぎ見て、肅然として戰慄を覺ゆるまでの感激に打たれた。信號兵はつぶれよとばかり喇叭を握りしめ、砲員は碎けよとばかり砲彈を抱きしめた。石炭をくべる十能は舞ひはじめる。汽罐は眞紅に燃え、機械はうなりを生じて廻轉する。將卒の眦は裂けんばかり、嚙みしめた唇からは血も滴らんばかり、滿艦の將士聞として聲なく、只燃ゆるが如き眼と眼とを見合せて、倒れてもやまぬとの大覺悟が、心から心へと傳はるのみ、悲壯勇烈の氣、早くも既に敵を壓倒するものがあつた。

第一戰隊
第一艦隊に屬する。
上村中將
上村彥之丞。
第二戰隊
第二艦隊に屬する。

三笠を先頭とし敷島・富士・朝日・春日・日進の順序に單縱陣をなす第一戰隊は東鄕長官之を直率し、上村中將の率ゐる出雲・吾妻・常磐・八雲・淺間・磐手より成る第二戰隊を從へて敵に迫つた。此のまゝ相接近すれば、互に一舷の砲火を交へつゝ、航過するに過ぎない。さりとて敵前に於て針路を反轉する如きは思も及ばざる處である。

然るに意外も意外南西微南の針路を以て航進中なる先頭の三笠は、二時五分、敵前約八千米（メートル）に在りながら突如、取舵を採つて東北東に轉針した。後續の諸艦も之に從はねばならぬ。正にこれ東鄕長官の勇斷である。机上の演習に於て、かくの如き手段を採らんか、多くの場合に於て下策として惡評を蒙るに過ぎないのである。然るを皇國の興廢を其の双肩に擔ひながら、重大なる合戰の初頭に於て、かくの如き方法に出られた其の勇斷と果敢、これぞかの大捷を博した最初の一大原因であつて、實に後世の濫りに摸倣を許さざる所、天下一品の獨壇場であつた。敵艦隊の幕僚が「しめた、敵は轉回した、我は勝つた。」と言つたと言ふのは、實に此の刹那であつた。さりながら、それこそ机上の戰術であつた。

午後二時八分敵砲擊開始ノ位置

轉回のために、我が各艦の位置が一時一點に止るのを見

て、敵は得たりとばかり一團の白煙がスワロフより騰ると同時に數艦一時に砲火を開いて、われに向つて猛射をはじめた。先頭に在る三笠の附近は巨彈の雨注で爆煙と水煙とが、艦影を蔽ひかくした程である。けれども長官は右手の双眼鏡で時々敵を睨みながら、左手には一文字吉房の軍刀を握りしめて微動だもされない。泰然として彼我の狀況を見詰めながら、なか〳〵射撃開始の命を出されない。加藤參謀長も亦冷然として、全艦隊の對勢を眺めて居る。秋山參謀は烱々たる眼光で、敵の動作を熟視して居る。

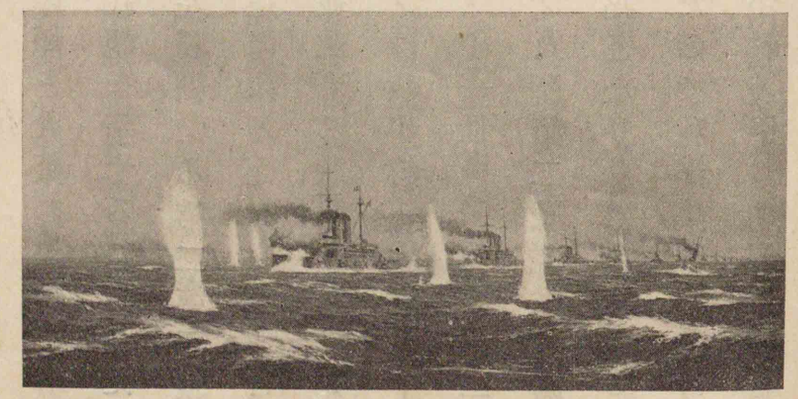
第一戰隊の各艦が、針路を變じ終ると同時に、三笠は猛然として敵の先頭を壓迫すべく、ズン〳〵と距離を詰めて行く。所謂丁字の戰法が敷かれはじめたのである。

午後二時十分、戰機正に熟するを見て、遂に「打方始め」の令は出た。待ちに待つた將卒は、それとばかりに猛烈なる射擊を開始して、敵の左右兩列の先頭艦たるスワロフ及びオスラビヤに集彈した。距離正に六千四百米。

かくして日本海大海戰の幕は切つて落され、沖の島一帶の海上

加藤參謀長
加藤友三郎、當時海軍少將。

秋山參謀
秋山眞之、當時海軍中佐。



彼我艦隊酣戰（午後二時四十分頃）の光景　（東城鉦太郎筆）

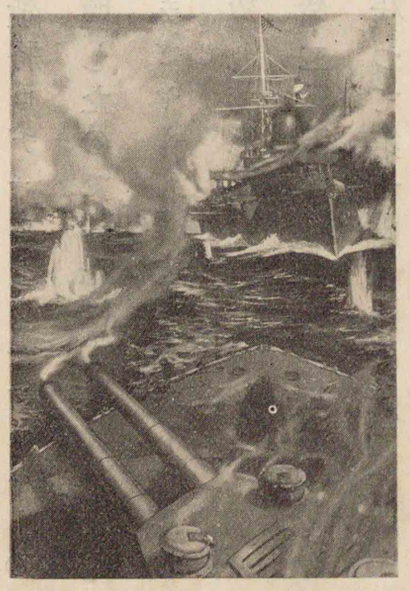
は、彼我射撃の砲煙と砲彈炸裂の爆煙と、火災の黑煙と各艦の煤煙とで、所謂天日爲に暗しの壯觀を呈するに至つたのである。敵は漸次東方に變針し、左翼列たる第二・第三戰艦隊は右翼列たる第一戰艦隊の後尾に入るが如き隊形となり、不規則なる單縱陣を以て我と並航する狀態となり、先頭に在る第一戰艦隊の旗艦スワロフは我が第一戰隊の中央と相對し、第三戰艦隊の旗艦ニコライ一世は、略〻我が第二戰隊の後尾と相竝んだので、スワロフ及び第二戰艦隊の旗艦オスラビヤは、我が諸艦射撃の焦點となり、殊にオスラビヤの三煙突は射撃の好目標となつたので、我が集彈を受けて大火災を生じ、檣（マスト）は折れ、煙突は裂かれ、裝甲は龜裂し、砲塔は破れ、甲板は黑焦げとなり、死屍累々の慘狀を呈し、黑煙は濛濛として空に騰つた。

距離愈〻近付いて、五千米內外となるや、我が猛擊は一層其の勢力を增し、殆ど百發百中の威力を發揮し、スワロフの司令塔に命中した一彈は、敵將ロヂェストウェンスキーの頭部を傷け、且つ舵機を破壞したので、同艦は右舷に回頭して列外に脫出した。オスラビヤも亦是と相前後して戰列外に出て、幾ばくもなく沈沒してしまつた。

オスラビヤに代つて第二戰隊の先頭に立つたシソイヴエリキーも、スワロフに代つて第一戰艦隊の先頭に立つたアレキサンダー三世も、亦我が集彈を蒙り、大火災を生じて

列外に出たので、敵の陣形は全く亂れ、且つ西風に靡ける火災の黑煙は、濛氣と相混じて海面を蔽ひ、時々射擊を中止しなければならない位であつた。

アレキサンダー三世に代つて嚮導艦となつたボロヂノの艦長セレーブレンニロフ大佐は、我が艦隊の後尾を突破し、北方へ脫走せんとして轉針したが、我が第一戰隊が、日進を嚮導艦とせる逆列隊形に急變して、其の先頭を壓迫するに遇ひ、再び東方に變針して第二戰隊の猛火を



砲擊中の三笠

受くるに至つた。

アレキサンダー三世が火災を消して戰列に復し、混亂せる艦隊を率ゐて南方に向ふに至り、彼我兩隊の距離漸く遠ざかつて煙霧の中に敵影を見失ふに至つた。

そこで我が主力部隊は、行く〳〵隱見する敵の巡洋艦等を緩射しつゝ南下したが、午後五時二十七分第一戰隊は再び北方に轉針して、敵の主力を索め、第二戰隊は砲聲によつて我が第三戰隊以下の敵巡洋艦と交戰中なるを察知し、南西に向ひつゝ敵に迫つた。

かくて、第一戰隊は北西の針路を以て前進中、五時五十分頃、左方間近の距離に在る敵艦ウラールを發見して一擊の

下に擊沈し、尙北方に索敵中、敵主力の殘艦ともおもはれる、數隻の一群となつて北東方面に遁走中なのを發見したので、直ちに之に近付いて、並航戰を開始した。　これは曩に我が視界外に逸し去つた部隊が、隊伍を整へ、再び浦鹽斯德に向ふ途中なのであつた。　我が猛烈なる砲火が、再び彼等の頭上に注がれるや、アレキサンダー三世は直ちに列外に逸して後方に落伍し、ボロヂノは大火災に罹つて、七時二十三分見る〳〵中に沈沒してしまつた。

時既に日沒に近く、夕陽漸く傾き、視界自ら狹小となつたのみならず、我が水雷艇隊は既に漸次敵に肉薄せんとしつつあるを以て、長官は七時二十八分、爾後の攻擊を驅逐隊及び水雷艇隊に讓り、其の他の全軍には、翌朝鬱陵島に集合すべきを電命し、第一戰隊を率ゐて、血腥き戰場を去り、八時過、第二戰隊を合せ、遠く鬱陵島方面に向ひ、北上して敵の遁竄に備へた。

鬱陵島　朝鮮江原道の東の小島。

瓜生中將　瓜生外吉。

武富少將　武富邦鼎。

東郷少將　東郷正路。

第四戰隊　第二艦隊に屬する。

是より先き我が出羽中將の率ゐる第三戰隊たる笠置・千歳・音羽・新高と、瓜生中將の率ゐる第四戰隊たる浪速・高千穗・明石・對馬と、片岡中將の統率せる第三艦隊中の二隊たる、武富少將の率ゐる第五戰隊、嚴島・鎭遠・松島・橋立・八重山と、東郷少將の率ゐる第六戰隊、須磨・千代田・秋津洲・和泉とは、午後二時過我が主力が始めて敵と戰鬪を開始するや、直ちに敵の後尾を衝かんがため、急航南下し、第三・第四戰隊は、共同して

二時四十五分から、其の優速を利用して、敵の前後左右に出沒し、オレーグ・アウロラ・スウェートラーナ・アルマーズ・ドンスコイ・モノマフ等の巡洋艦及び運送船隊等を攻撃し、四時過、全く之を潰亂せしめた。敵は個々分裂して、終にまた收拾すべからざる狀態に陷つた。四時二十分頃第四戰隊は敵の一運送船を擊沈し、他の一隻に大損傷を與へ、第五・第六戰隊と合して更に敵を掩擊する內、同四十分頃我が主隊に攻擊されて南下して來た四隻の敵艦は、是等の巡洋艦隊と相合したので、第四・第六戰隊は少時近距離に於て、是と苦戰するの窮地に立ち、我が浪速及び笠置は敵彈を受け、應急修理のために列外に出づるのやむなきに至つた。

五時三十分頃、南下して來た我が第二戰隊の砲擊によつて敵は益〻混亂に陷り、北方に遁れんとした其の大部は、第四・第五・第六戰隊の追擊する處となり、スワロフ・カムチャッカ等は擊沈さるゝに至つた。かゝる中に、鬱陵島集合の電命に接し、是等の各隊は戰鬪を中止して主隊に合すべく北進したのである。

猛鷙の戰を眺めて、爪を研ぎ、羽ばたきをしながら、時機を待ちつゝあつた群鷹にも似た樣な我が水雷艇隊は、時こそ來たれと敵に肉薄し始めた。由來我が水雷艇隊たる、驅逐艦や、水雷艇の勇敢なる突擊に至つては、世既に定評がある。かの威海衛に於ける水雷艇の夜襲と云ひ、旅順口外に於け

る驅逐艦の猛襲と云ひ、日本人の性格に適した魚雷攻撃は、我が海軍の强みであると共に、實に我が國民の誇である。其の水雷艇隊が、すはとばかり、敵陣に躍り入つたのである。殊に晝間の戰鬪に大打撃を受け、右往左往する敵艦の事である。塒を失つた群雀を目がけて鴟梟の猛威を振ふにも似て居る。第一・第二驅逐隊及び第九艇隊は北方より、第三・第四・第五驅逐隊は東方より、第一・第十・第十五・第十七・第十八・第二十艇隊は南方より、殆ど三面合圍の形を以て、敵

日本海海戰圖

に肉薄した。朝來の風は稍〻靜まつたけれども、波濤猶高くして、船體の動搖は五六十度に達し、羅針は轉輾して殆ど其の用をなさない。艇首から覆ひ被さつてくる怒濤を劈きながら、突撃に繼ぐに突撃を以てし、一艇去れば一艦迫り、發射した魚雷は、敵の前後左右から、矢の如く突進しては命中爆發する。晝を欺く敵の探照燈は其處にも、此處にも一上一下して、應接に遑なき我が水雷艇隊の決死的夜襲を防いで居る。其の光芒の中には、或は白く、或は赤く、濛々たる砲煙が照らし出され、夜襲艦艇の附近に奔騰する水煙は、白銀の柱の如く輝き、發射管は、黄金色に照らされて、發砲の閃光と相映じ、眼もくらまん許りである。眞にこれ壯絶の極致

であつた。甚だしきに至つては、敵の備砲の俯角が利かぬ程度にまで、これに肉薄したものもある。其の何艦を沈め、何艦に命中せしめたのかが判らぬ亂戰で、所謂當るを幸ひ薙ぎ倒したのである。或は敵の列中に突入して、其の砲彈が雨の如く落下する中に、魚雷を發射した驅逐艦もあれば、或は敵の隊列を横斷して、其の反對側に出で、敵甲板上の人員を指呼の間に目擊し得るまで、肉薄襲擊を決行した水雷艇もある。亦以て如何に猛烈なる夜襲振りであつたかを想像する事が出來る。

夜が明けて見れば、視界及ぶ所唯閒寂として敵の片影もなく、只怒濤の中に、木片や釣床類の漂ふのみであつて、味方は僅かに水雷艇三隻を擊沈されたに過ぎないのであつた。これに反し敵の大部分は、大損害を被り、各隊各艇、互に分離し、只ネボガトフ司令官の率ゐる、ニコライ一世をはじめアリヨール・アプラキシン・イズムルード等の一隊が辛うじて、此の激戰場裡から脫れ得て、北二十三度東の針路を以て、一意浦鹽斯德に向つて居るのみであつた　（今日の海軍）

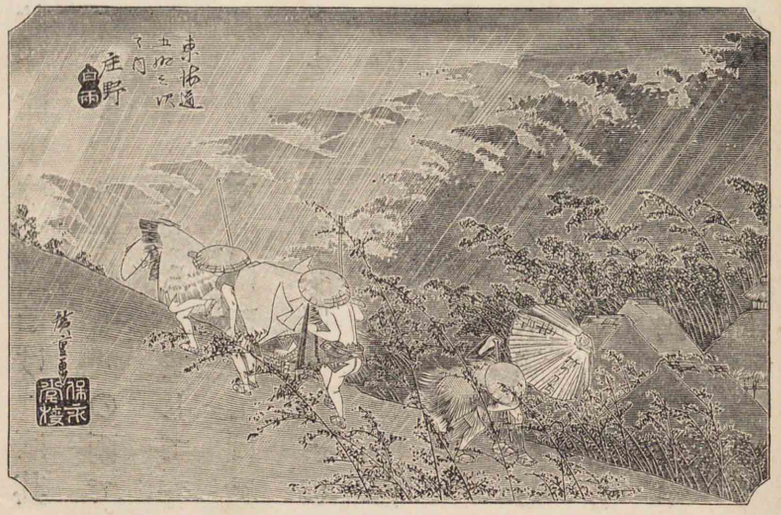
一四　雨の趣味

黑田鵬心

黑田鵬心　明治十八年東京に生る、名は朋信、美術批評家。

雨にはいろ〳〵の種類がある。しと〳〵と降る春雨もあれば、盆を覆すやうな夏の夕立もあり、淋しい秋の雨もあれば、寒い風を伴ふ冬の雨もあり、又鬱陶しい五月雨もある。

さうして、其の種類に從つてそれぞれ違つた趣味を持つて居る。柳の若芽に煙るやうな春雨の長閑けさには、優しい女の趣があり、乾ききつた河原の石をも轉ばすばかり勢込んで降る夕立には、强い男の趣がある。併し、何れにしても雨は單獨には餘り趣のないもので、何か背景又は添物を得て始めて趣を生ずる。例へば、春雨ならば、柳の木があつて、其處を蛇の目の傘をさした人が通るとか、夏の夕立ならば向ふに山があつて、手前に川があり、河原に急ぐ男が用意の蓑と笠とを取出して走るとか、五月雨ならば、それがみづみづしい青葉に降注ぐとかいふやうに、柳・傘・山・川・蓑・青葉などの背景や添物があつて、ここに始めて雨の趣味が發揮され



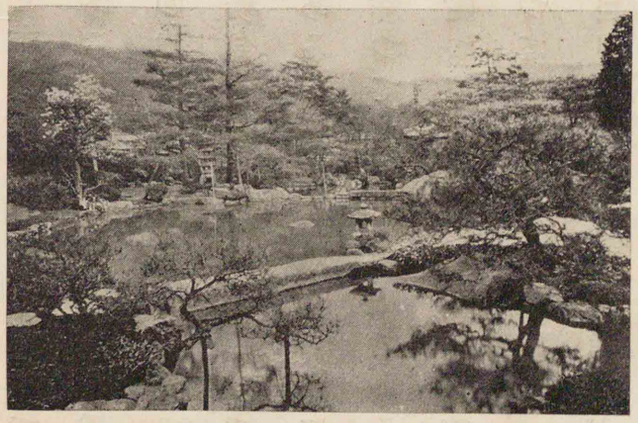
東海道庄野の白雨　（廣重筆）

るのである。

雨の趣味は、動の趣味である。新緑などは全然靜の趣味であり、花も落花の場合を除けば靜の趣味であるが、雨はいくら靜かに降つても動の趣味である。隨つて時間的の趣味を持つて居る。花や新緑は一目見ればすぐ其の趣味が味はれるが、雨は少くとも

數分間續けて見なければ其の趣味を味ふことは出來ぬ。夕立のやうな短時間の雨でもやはりさうである。まして春雨・五月雨・秋雨などに至つては猶更のことで、數時間も降りつづいて居る中に、おのづと其の趣味が味はれるのである。

雨はもと〳〵水滴であるから、花や青葉のやうに明瞭な形や色を持たぬ。其の代りに、花や青葉の持たない所の音を持つて居る。花や青葉も風によつて



日本庭園

多少の音を出すが、それは寧ろ風の趣味で、花や青葉其の物の趣味ではない。落花も落葉も詩に歌ふほど音のあるものでない。之に反して雨は天空から降つて來て、必ず地上の何物かに當つて、可なり高い音を立てる。そして、其の音が雨の趣味の少からぬ部分を占めて居るのである。春夜部屋の中にゐて、しと〳〵と降る雨の音を聞けば、少しも外を見ないでも、十分に春雨の趣味を味ふことが出來る。

戸外に居る時は別として、室内に居る場合には、誰しも先づ軒又は庭の木の葉に當る雨の音によつて雨の降出したことを知り、其の趣味を味ふものである。雨の程よい音を聞いて居ると、何となく落着いて、一種言ふことの出來ない

穏かな感情の起るもので、親しい友としんみり話す時などの情調に最もふさはしい。

雨の色は餘り趣味に關係しないが、雨によつて濕された色は甚だ趣味の深いものである。新綠なども雨に濡れると殊に光澤を增し、幹や枝も全く前と變つた佳い色となる。又石は雨に濡れて始めて其の趣味を發揮するものである。隨つて石燈籠や飛石は雨に濡れると非常に佳い色になる。土は石ほどではないが、乾いた時よりは雨に濡れた時の方が餘程趣が深い。併し此等は打水をしても同じやうになるから、殊更雨の趣味とは言へないが、雨に附隨した趣味としては主なものである。（人生と趣味）

太閤
豐臣秀吉

一五　曾呂利新左衞門

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ。」と問ひけるに、對ふるやう、「臣が姓名は卽ち曾呂利新左衞門と申し候。」太閤「さて奇なる姓もあるものかな。して、其の曾呂利と申す姓には、何ぞ謂はれにてもあるか。」と問はせけるに、又對ふるやう、「聊謂はれこれあり候。別にあらず、臣の拵へたる鞘は堅くして、そろりと入り、敢へてつかへず。是を以て曾呂利と申し候。」太閤「こは奇なり。復折節來るべし。」といふ。他日復太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、「汝の姓名は何とか申しした。」對へて曰く、「曾呂利、曾呂利、

新左衞門新左衞門。」太閤異しみて其の重言を尋ねけるに、新左衞門の對ふるやう、「殿下、先に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に、臣も亦殿下重問の意に從ひ、同じく重言を以て對へ候なり。」

豐臣秀吉と自署

新左衞門或時太閤に向ひ、「願はくは一日御耳の香を嗅がせられたし。」といひければ、太閤はいぶかしみ、「こやつ又何をかなすらん。」と思ひしが、「何はともあれ宜し。汝がよきに嗅げよ。」と許されしかば、諸大名の御

機嫌伺ひに出でたる時を窺ひ、太閤の耳根に口寄せて何やら言ふ體なれば、皆々心中密かに驚き、「かやつ何を言ふらん。もし我を讒言するものにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛する所なれば、かやつが言ふこと御用ひあらんも、亦測られず。」と憂ひ、各〻わが邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて、密かに曾呂利が方へぞ贈りける。數日にして金銀財寶山の如く集ひければ、太閤の御前に出で、謝して言へるやう、「殿下一日の御耳を拜借し、其のかうばしき香を嗅ぎたる功能によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて、殆ど坐するの餘席これなく候。これ全く殿下御耳の功能なり。」とありければ、太閤も亦愕然として驚きけりとなん。

又或日の事なりしが新左衞門太閤の機嫌を取り、頗る其の功ありける程に、太閤「何なりと汝の望むものを取らせん。」とありけるに、新左衞門の言へるやう、「臣敢へて大なる望もこれなく候。唯紙袋二つほど米を賜はりたし。」太閤「そはいと〳〵易き事なり。餘り寡欲の至りならずや。」と仰せありけるに、新左衞門「これにて澤山なり。」と申して退出しけり。やがて二つの紙袋を張拔き、數十人を雇ひ來りて、太閤の御前に出で、「前日御約束の米これに賜はりたし。」とて米倉二戸前蓋うたりけるにぞ、さすがの太閤もこれには呆れて、少時言句もなかりけりとぞ。

又或日の事なりしが、嘗て太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ之を庭の泉水、或はその近邊に放ちて娛樂となしけるが、程經て見厭きたりとて、近習の者に、「何ぞ一用を言出づる者にこれを與へん。」といはれけり。皆々大いに喜び、「臣は之を紙押になさん。」と言ひ、或は「臣は金の茶釜の蓋なければ、せめては之を以て其の蓋の取手になさん。」と言ひ、或は何と言ひ、かと言ひて、一個づつ賜はりしうち、新左衞門の乞ふやう「臣は人間の角力も既に見厭きしことなれば、此の蟹を集めて角力を致させんと存ずるなり。」と言ひければ、太閤「角力とありては、五個や十個にては其の興薄かるべし、悉く持行くべし。」と、殘れる蟹を皆新左衞門に與へけりとなん。（常山紀談）

常山紀談　戰國時代から德川の初期迄に於ける名將傑士の言行を集め記したもの。

一六　英魂の前に

上田恭輔

上田恭輔
元滿鐵調査課員。

東清鐵道
現在の東支那鐵道。

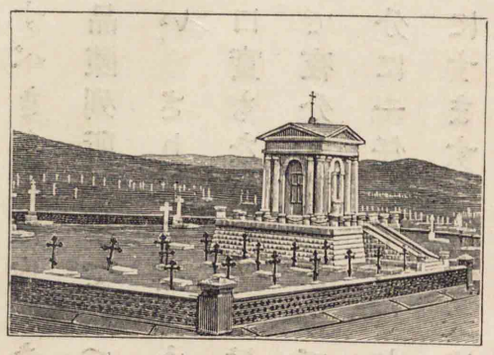
日露戰役後數年を經た時の出來事である。或時東清鐵道本部の副總裁一行が、多數の幕僚を率ゐてはるばる大連の滿鐵本社を訪問されたことがあつた。

滿鐵としては容易ならぬ客として、出來る限りの歡待をしたことは無論である。接伴順序の終に至つて、一行は旅順には關東都督がをられるのに、無斷で歸つては濟まぬから、一應かの地に出向して都督に敬意を表したいと言ひ出した。頗る道理あることであるから早速その旨を旅順に傳達して都督の都合を伺ふと、それは困る、何とかして來ない様にしてくれとのことであつた。當時の旅順は現在とは大違ひで、博物館も無ければ、大學もなく、遠來の御客に見すべきものは血腥き古戰場と、日本軍の武勇を物語る戰利品陳列所のみであつたから、都督の困られたのも無理はない。さりとて露都から來た一行の公式の訪問を拒絶する口實もないので、私はほと〳〵弱らされてしまつた。そこで夜分電話をかけて直接に都督に事情を具陳し、萬事を自分に一任して下されば、戰跡も見せず、賓客の感情も害せずにすますべき工夫を持つてゐる旨を具さに說明して、やつと承諾を得た。

さて翌朝臨時列車で一行を旅順に案內し、先づ役所に都

督との會見をすませ、それから一行を露軍陣歿者の爲に表忠碑を建立した案子山麓の露人墓地に案内した。

一行は馬車から降り、先づ脱帽し、直立不動の姿勢をとつて忠魂碑に向つて最敬禮をなし、次に段上に登つて露文の碑銘を一讀した時は一行の眼は潤んでをつた。碑の後方に廻つて、私が大島大將の撰文の大意を説明し、



露人墓地

「偶〻互に敵となり味方となつて、戰場に鎬を削つても、これ皆祖國の爲であつて、個人の怨では無い。よつて一度戰地で隕命すれば、最早敵でも無ければ味方でもない何れも皆祖國に對する忠勇の烈士である。これが爲に、人道友愛の上から、必ずその遺骸は禮を盡くして鄭重に埋葬すべきである。況や、露國と我が國とは既に國交復舊して友邦となつてゐる。是を以て、日本政府は旅順の軍憲に特命して、戰歿地點に假に埋葬してあつた露軍殉國の士の遺骸を捜索せしめ、禮を盡くして之を特に露人墓地の境内に改葬せしめた。」

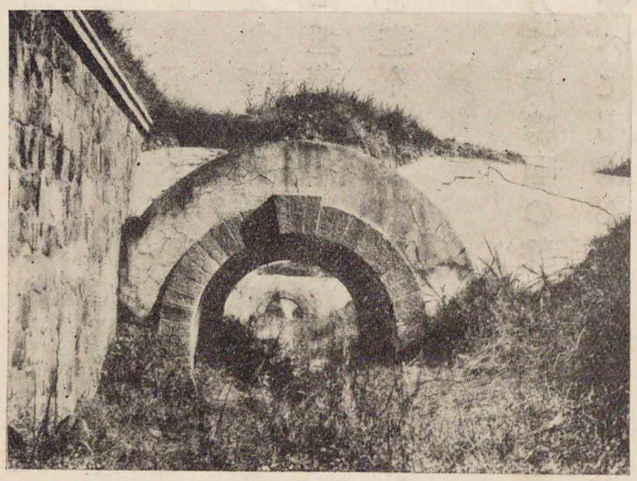
案子山
旅順市街の北。

と話して居る間に、早くも後方では嗚咽の聲が聞えた。

「露國の忠勇の士の英靈を長へに弔はんが爲、將また彼等の義烈を千載に傳へんが爲に茲に此の碑を建つる。」

と說明し終ると、一同は感極つて男泣にわつと泣きだした。

時は正に滿洲の夏、焦りつく樣な炎天にも拘はらず、一同は再び帽子を冠らず、頭に强烈なる日射を受けながら、順次一々無名の士の墓に弔禮した。最後に禮拜堂のキリストの聖像の前に出ると、曾て除幕式の際に露國皇帝より記念碑に獻げられた美麗なる金屬製の花環と、乃木大將が手づから供へられた榊



大案子山堡壘の一部

とがあつた。日本の國敎である神道の典禮によれば、神を祭るには必ず榊を以てする。乃木大將は露軍の戰死者をすべて神として禮拜されたのであると說明したら、副總裁始め一同は床上に跪いて、黃色く枯れた埃だらけの榊の枝に恭しく接吻した。

其處から引返して都督官邸の午餐會に臨んだ。食卓につくと、御馳走が出るに先だち、主賓は起ち上つて都督に向つて演說を始めた。

「宴會に於ける禮節を辨へず、且つは閣下竝びに列席の諸公に對して甚だしく禮を失する事は百も承知して居るが、冀はくは特に寬大る態度を以て、一言卑人の胸に溢れ

んとする切なる思を漏させて頂きたい。」

と前提して、流るゝ涕を拭ひもあへず、聲を曇らし、言葉も切れぎれに、露軍戰歿者に對する日本國民の好意の籠つた行爲を感謝し、世界古今の戰史に異例である美事を稱揚して、熱血的の大雄辯を振つた。これが爲に都督を始めとして主人側は大いに面目を施したのみならず、あの時位に主客相共に胸襟を開いて、意氣投合した會合はめつたに無いと思ふほどの盛宴となり、滿堂はウラー、ウラーの喊聲で轟き渡つた。（旅順戰蹟秘話）

ウラー　日本の萬歲といふにあたる。

沼波瓊音　名は武夫、明治十年名古屋市に生る、國文學者、昭和二年歿。年五十二。

一七　二重橋の畔

沼波瓊音

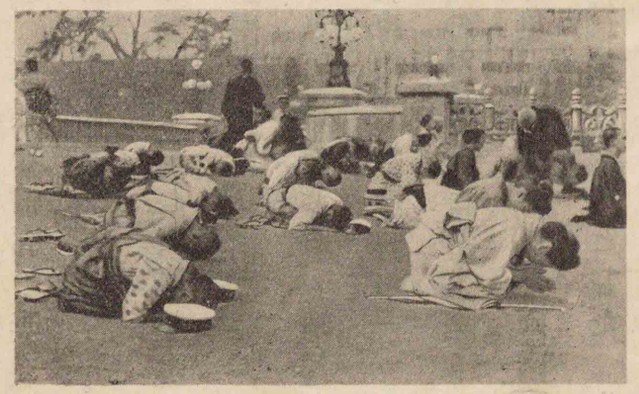
明治四十五年七月二十日、スツツケンの「飛行機」を見て土曜劇場を出た。變な青空であつた。眞黑な輪廓の凄く劃然とした雲の大塊が、空の半ばを領して横たはつて居た。其の爲に地上の物の色が、氣味惡き變調を呈して居り、水のやうな風が足許から吹いてゐた。歸宅したが、斯ういふ平衡を失した氣象に居耐まらぬのが私の病である。晩餐を濟ますと直、目的も無く家を出て電車に乘つた。

ふと隣席の人が夕刊を讀んでるのを見ると、聖上陛下の御重患を報じた記事の題が大きく見えた。今夜の兩國開も、爲に中止になつた事も見えた。私はハッとした。先刻號外賣の聲がしたが、それであつたかと思ひ當つた。

聖上陛下　明治天皇

翌日から陛下の御病狀は新聞により號外によつて、殆ど御傍に奉侍するが如く承り得た。併し私はいづれ御癒りになるだらうと思つて居た。御病狀は追追と御惡いやうであつた。これではと驚かれるやうな報告もあつた。

新聞は、二重橋畔に人々が寄集まつて、御平癒の祈願をする記事、及び其の寫眞を日々掲げるやうになつた。其の寫眞には、素朴な老媼の地上に伏して居る



二重橋畔の祈願

姿などがあつた。人々は會ふ毎に、御病狀を語るやうになつた。各區の住民は、もよりもよりの神社に集まつて祈願を籠めた。其處には燬くが如き熱暑の日にも、夥しき人が集まつた。各交番所には、御經過の掲示を見るやうになつた。電柱などには、出る毎に號外が貼られた。往來の人は、必ずそこに足を停めた。私は心の動搖をどうすることも出來なくなつた。どういふ場合でも、筆を執つて居なくてはならぬ短き人生の間に、茫然として居る時間があつてはならぬと、常に思つて居た私が、時々筆を棄てて、空然と緣に出て、池の金魚を見詰めるやうな事が多くなつた。

二十九日の午後、私は上野帝國圖書館に居つた。號外賣

出納壇　貸出の書物を出入れする壇。

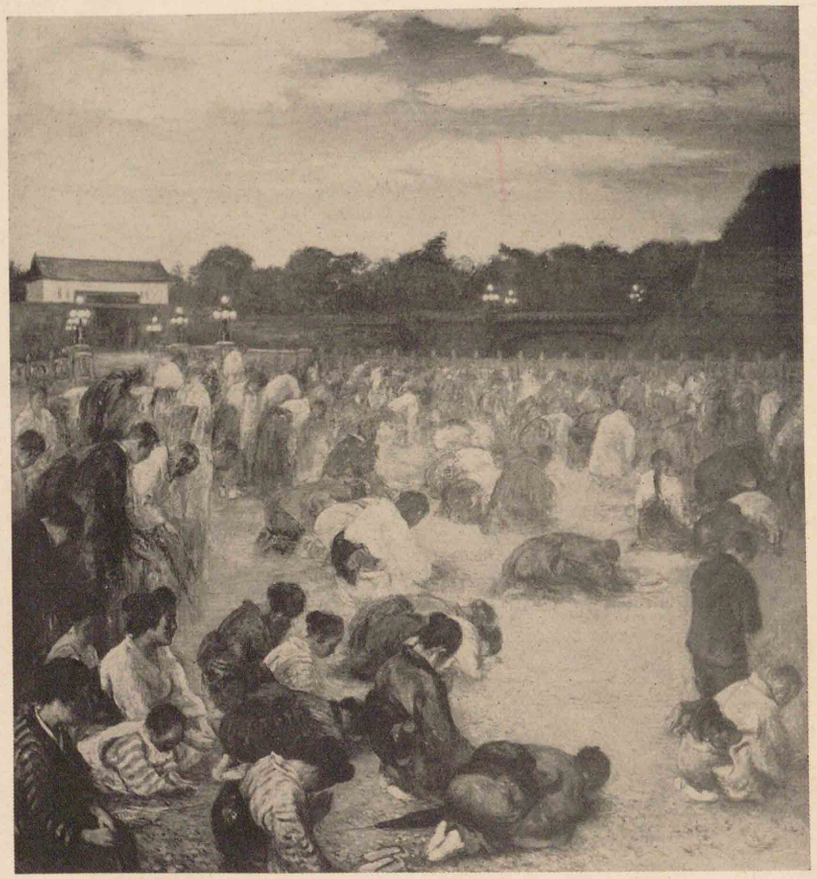
の鈴の音が、又けたゝましく聞える。圖書館の事とて、誰一人一語をもらす者もない。寂として居た。ゾウといふ音が始まつた。顏を擧げると、閲覽人の多くが、皆同じ方角に目を注ぎつゝ、歩み行くのであつた。顧みると出納壇の前に、號外を貼つた掲示板が立てられたのであつた。私は直に椅子を離れようとして、一種の恐れを覺えて、暫く躊躇した。が、遂に進み寄つた。

「殆ど絶望」といふのが、其の號外の標題であつた。文中に「御四肢の末端暗紫色」云々の文字が見えた。この前に集まつた人々は、默したる儘、交る〳〵これを讀んだ。言ふべからざる光が誰の目にも輝いた。深い息も聞えた。壇上の

係員は、默してこの人々を見て居た。讀み終つた人々は、默して力なく席の方へ行く。默々の間に、絶望悲痛の大いなる號びを聞く心地がした。

今度號外が出たら、もう駄目だ、あゝ駄目かなあ、と思ひながら私は歸つた。號外賣の鈴がまだ聞えない。晩餐を濟ました。永き日は漸く暮れて行く。號外賣の鈴はまだ聞えない。私は卒然起きて、着物も換へず二重橋へ向つた。電車は滿員であつた。和田倉のあたりから、響を憚つて非常に徐行した。この間も號外賣の鈴は聞えなかつた。大半は馬場先門で下りた。

見渡すと、黄昏の二重橋は、唯人を以て埋まつて居た。新



國民の祈禱　田邊至筆

に設けられた電燈が、そこ〳〵に紫に照つて居た。二重橋上の祝日の折に點される電燈の一つが點火されて居た。私は人を分けつゝ、二重橋の其の一つを正しく左に見る所まで進んだ。「南無妙法蓮華經」と聲振立てて連唱するのが最も高く聞える。念佛の聲も聞える。祓詞を泣聲になつて稱ふるのも聞える。夥しき群衆は、砂利の上に端坐し、或は平伏して、思ひ〳〵の神佛の力に縋つて御平癒を祈つて居る。「どうぞ、どうぞ。」といふ聲も聞える。號泣してる者もある。この吹き通しの廣場も、群衆の爲に蒸すやうな暑さである。尻端折つた人々が、祈願者の間を往來して、團扇で扇いでやつて居る。様々の祈の聲は愈〻錯綜して恐ろしき

響を成して、宮居の内にも聞え行くばかり。宮城へ出入する人は愈、頻繁である。

文明か未開か、智か愚か、信仰か迷信か、そのやうな傍觀的批評を思浮かべるには餘りに高く大いに、且つ切迫した光景である。そこには唯君を念ふといふ純なる熱情が、烈火の如く燃え上り渦卷いて居る。「御祈願の方は、前に御出なさい、御祈願の濟んだ方は、なるべくうしろへ行つて下さい、非常な暑さですから。」と巡査が諭して居る。私は祈願の人々の間に入

明治天皇宸影

つて、いきなり地上に伏した。「どうぞ御癒りなさるやうにお癒りなさるやうに。」と斯ういつた時、涙は迸るやうに流れた。止めどもなく流れた。物質と精神との力の爭ひである。物質的に如何に助かるまじき玉體も、人々のこれだけ熱中せるエネルギーによつて、お助け申すことが出來ない事はあるまい。人々は愈〻多く、祈願の聲は愈〻激しい。私は一先づ後に退いた。そして暫く立つて居た。あらゆる電燈は、捲騰る埃煙に包まれて朧に見える。二重橋の中の橋の上に月が懸つて、雲越しに淡い光を見せて居た。私は涙の溢るゝのをどうすることも出來なかつた。思はず再び地上に伏して祈願を凝らした。

エネルギー　力。精力。

私は和田倉門の方に出た。この間往き交ふ人の話を聞くに、それは悉く聖上の御身の上であつた。一人として私事を談ずる者は無かつた。歸宅するや、早速多賀神社の神靈を上げてある神棚に燈明を供へしめた。そして家族に二重橋の光景を語つて、斯うして居る場合でないといつた。妻も子供も婢も、皆連立つて出て行つた。あとに獨り神棚の前にひれ伏し、直泣きに泣きつゝ禱つた。玉體御安泰に復し給はば、この成功疑はしき一小操觚者の命などは、召上げられても厭はぬと祈つた。號外の鈴は少しも聞えなかつた。夜に入つて號外の出ぬことは近頃ない。どういふものであらうと思つて居るうち、はや十一時を過ぎた。月

は或は照り、或は曇つた。

皆が歸つて來た。私と同じ感動を以て歸つて來た。御再發は仕方が無いとしても、ともかくも一旦御癒りになるだけでもよい。この儘御かくれになつては如何にも殘念だと妻がいつた。私はあれだけの熱心の力は、必ず玉體を支へ得ると信じて床に入つた。

翌朝起きて戸を繰開けて居るところへ、婢が小さい號外を持つて來た。「崩御」といふ字が砭(はり)のやうに目を刺した。「おかくれになつたぢやないか。」といつた。婢は「えゝさうです……どうも。」と言つて去つた。妻の寢てゐる部屋へ行つて「おい、おかくれになつた。」と言つた。「えゝさうですか仕樣がありませんねえ。」と言つた。

世は極めて靜かであつた。私はこのやうな靜かな朝を經驗したことがない。日は淡く照つて居た。金魚が音なく動いて居た。薄赤い花魁草の花の下に、莖の地を匍つてゐる桔梗が、珍しく純白の花を着けて、それが靜かに此方を向いて居た。新聞が來た。それには見馴れ奉つた陛下の御像が、太い黑枠で圍んであつた。

一八　桃山御陵

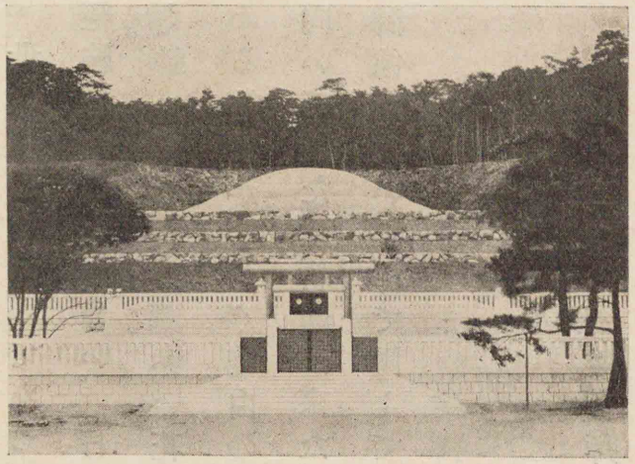
田山花袋

桃山の二つの御陵を拜して、私はいろ〳〵なことを考へた。

田山花袋　名は錄彌、群馬縣の人、小說家、昭和五年歿、年六十一。

天武天皇の御陵
奈良縣高市郡高取村大字野口の檜隈大内陵。

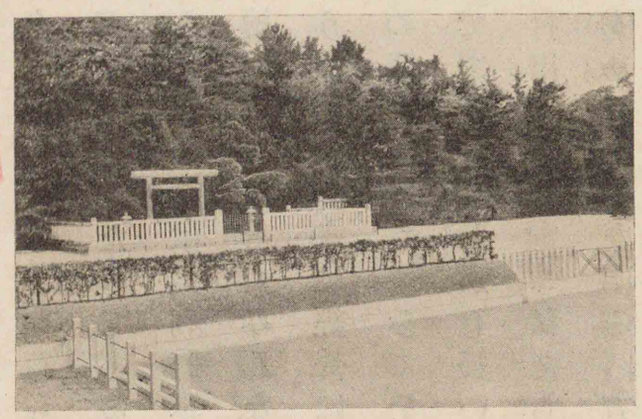
柏原の御陵
桓武天皇の御陵伏見山松原に在る。



伏見桃山御陵

今を以て古を考へるといふことがあるが、實際私は、御陵の前に額づいて、遠い昔のことまでも取集めて考へずにはゐられなかつた。私は天武天皇の御陵に、後から持統天皇の御陵を合せたことを想ひ起した。また柏原の御陵に、御子の嵯峨天皇が涙を流して祈念されたことを想ひ起した。それは、その大小はあつたにしても、昔はどの天皇でも、皆今日と同じやうにして、一つ一つその御陵

泉涌寺
もと法輪寺、仙遊寺とも號する弘法大師を開山とする。四條天皇を始め後土御門天皇以後歷代の御陵が在る。



柏原御陵

を築かれたばかりでなく、その當時の國民の悲嘆をも俱にその中に籠めて、埋葬されたのであつた。

しかるに、中世以後になつては、さうしたことは絶えてしまつてあの京都の東山の南のはづれに近い泉涌寺の中に微かにその存在を示されるだけになつてしまつた。そして元からあつた一つ一つの御陵などでも、亡びた國の帝王の陵ででもあるかの様に全く顧みられずに幾世紀か

を過した。　中には、どれがどなたの御陵であるか、わからなくなつたやうなものもある。　つまり、それだけ國が衰へ世が沈んでゐたのである。　さうして置くべきものではないといふことは、足利將軍も信長も、秀吉も、家康も、またそれに續いた後繼者も、みんな知らないことはなかつたのであらうけれども、或は經營に忙しく、或は戰亂に追はれ、或は自己の驕奢に心も盲ひて、そこまで手を出す餘裕がなかつたのであらう。　しかし、長い間の歷史の波は、漸く大きなものを打出して來た。　私たちは次第に闇い〳〵　歷史から、眼もきらめくやうな明るい方へと出て行つた。　それを思ふと、維新の時に、山陵の荒廢に着目して、それによつて勤王の志を

燃立たせようとしたもののあつたことなども、見逃してしまふことのできない事實である。

桃山の御陵に參拜するものは誰か我が大倭の昔を思ひ出さぬものがあらう。　千年にして始めてその昔に還されたその明治天皇の偉大な功業を。　自ら戸を閉ぢるやうな卑屈な政治の拘束から脫して、飽くまで外へ伸びて行かうとしたその隆んな國運を。　何等の好運ぞ。　私たちは大倭時代よりも、更に一層光輝あり力ある世を、あり〳〵と眼の前に見ることができたのである。　私達は佛敎などに惡くとらはれて、夥しく感傷的になつた社會の空氣から全く脫却して、更に自由に大きく呼吸づくことができる世に遭逢

したのである。私は桃山御陵の前に立つ毎に、いつも雄大な「時」の羽風が耳邊を掠めて通つて行くのを聞き得るやうな心持がした。（花袋行脚）

一九　一ノ宮だより

芥川龍之介

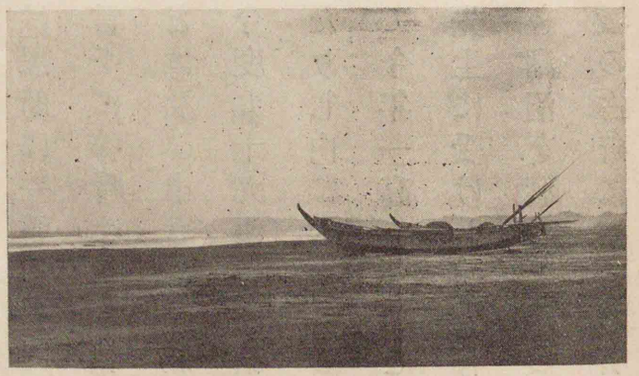
芥川龍之介　東京市の人、小説家、昭和二年歿、年三十六。

一の宮　千葉縣一ノ宮。

拜啓

大暑の候、先生には御變りも無之候や伺上候。小生は前月廿日より當地に參り居り、水泳と午睡とを日課の如く致居候。

一の宮の海は波高く砂荒く、僅かに三里を隔てたる大原さへ此處に比すれば、寧ろ雅馴なる感有之候。海岸も砂丘多く、所々に弘法麥と濱防風との青を點ずるも、荒涼たる觀をなすに止り候。海水浴客も他に比して少かる可く、旅館も今年は殊にあき間多き由に候。其の爲風俗は他の盛り場の如く俗惡を極め居らず、月齋町にて開かるゝ市の如きも、朴厚愛す可きもの有之候。



一ノ宮海岸

舊領主加納家は代々名君を出す由に候へども殊に當主加納子爵の祖父なる何とか院殿聰明の名あるもの

の如く、古老の口に遺れる逸事尠からず候。黑船渡來の節、老侯近侍の士堀内村次・加藤藤内の二人を召して、一首の歌を示せし事有之候由、歌は「黑船に一番槍を九十九潟先を爭へ村次藤内」村次言下に答吟すらく、「我こそは一番槍を九十九潟藤内などは及び申さぬ。」藤内亦聲に應じて、「及ばぬか及ぶか今度九十九潟一番槍は加藤藤内。」主從相顧みて粲然たりし由に候。其の堀内村次の孫は小生の友だちにて、今年一高二部甲を卒業致候。恐らく獨逸語は敎を先生に受けし事と存候。其の他一の宮川の上流に近き湖沼を洞庭と名づけ、櫻樹を其の上に植ゑ、樹間多賀城の古碑に擬せる石碣を立て、櫻樹一百有五十株を天女に獻ずる文を碑面に刻したる、皆老侯が風流の餘戲に候。くだらなき事を長々と書きつづけ恐縮に存じ候　是にて擱筆仕るべく候。不具

八月六日

芥川龍之介

菅虎雄

獨逸語學者。第一高等學校敎授。

多賀城の古碑

宮城縣宮城郡多賀城村市川に在る壺碑。

二〇　大根賣の話

菅虎雄様、

江戸の神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣歩いたが、どう

したことやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見ればはや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらず、これはつまらぬ、この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ちあすは釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながら、いつのまにやら兩國橋を渡り、本所の屋敷町を「大根、大根」と賣歩いた。

或御屋敷の表長屋の窓の内から「これ大根屋。」と呼ぶ。「やれ嬉しや、まづ知行にありついた。」と、呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひこんで、御長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀の内、門口には何某と標札が打つてある。

荷を持ちこんで見れば、縁先の障子をあけ、旦那殿が今、月代を剃られたと見えて、鏡立にむかつて自分の髪を結ひながら、「その大根はいくらぢや。」といふ。「百に三把でございます。」といへば、「それは高い。二十四文づつにして置け。」といはれる。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつことなれば「どうぞ三把にお買ひなされて下されい。けさから江戸中を泣歩いて、まだ一把も賣れません。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、懸直は一切申しません。」といふ。かの御侍かぶりふり、「それでも高い。まからずばまづよしにせう。」と言捨てて、縁先の障子をはたと締められた。

大根屋もいろいろというて見ても、かの御侍が相手にな

らぬ。そこで仕様ももやうもなく、「はてつまらぬ。もう日の入には間もなし。何でも四五百の錢を持つて歸らぬと、親子五人があすの命が繋がれぬ。何としたものであらう。」と、手を組んで思案をしながら、緣先の銅盥にふつと目がついた。こゝが大事の關所ぢや。心の關所が油斷なく番してゐたら、銅盥に目はつかぬ筈ぢや。子の曰はく、「君子固に窮す。小人窮すればこゝに濫す。」と。小人は困窮の時にのぞんで無理に困窮せまじともがくゆゑ、終に惡心が起つて、ふと銅盥に目がつくやうになる。こゝを指して、「小人窮すればこゝに濫す。」と孔子は仰せられたのぢや。

そこで、かの大根賣は、緣先の障子はしめてある、あたりに見る人はなし。かの銅盥を水の入つた儘で、大根二三把の下へそつと隱す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が、立ちどころに狹うなつて、五尺の身體を暫くも置くことがならぬ。

そこで荷を擔ぎ出して、門口を出ようとすると、障子の內から「これ大根屋」と呼びかけられる。ぬからぬ顏で「まかりません。」といふと、「いやいや直はねぎるまい。その大根買はう。」といひさま、障子をさらりとあけられた。大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、「何把程いりまする。はした賣はできません。」といふ、「いやいや、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。この緣先へ並べてくれ。」とい

はれる。　さあ大根屋も一生懸命。　障子の締つてあるうちなら、銅盥の出しやうもあらうに、今更銅盥が出されもせず。というて、賣るまいともいはれず。　逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。　千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろうろとしてゐると、かの御侍が、大根屋の顏をきつと見て、「われはきつううろたへてゐるぞよ。　まづ銅盥から出して、大根の數を數へて見よ。」といはれる。　大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ぶたれるかと、わなわな震へながら、かの銅盥を耻づかしさうにそつと出して、土に手をつき、「旦那樣、眞平御免なされて下されませ。　何を隱しませう。　先刻も申しまする通り、けさからまだ一文の商もいたしませず、このまゝ歸りまするとあす親子五人が食べますことがなりません。　悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もござりません。　七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命をお助けなされて下さりませ。」と、色青ざめて、土にあたまをすりつけて詫言をする。　かの御侍、思の外氣立のよい人で、更に立腹の氣色も見えず、「いやいや、その詫言には及ばぬ。　まづ大根の數を讀んで見よ。」といはれる。　こはごはながら、大根を緣へ積上げたところが二十三把。　かの御侍、やがて七百六十四文の錢を取出し、「さあ、その方がいふ通り、二十三把、七百六十四文、序に銅盥を添へて遣す。　貧のぬすみとはいひながらわれが根性はよほど汚れてあると見え

る。この銅盥は顔や手足を洗ふ道具なれどただ顔・手足を洗ふばかりではあるまい。心の洗ひやうもありさうなものぢや。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。」と言捨てて、障子を締めて内へはいる。

さてこの大根賣もこれから本心になつて、夜晝働き、遂に三年目には相應な八百屋になつたといふことであります。

（鳩翁道話）

鳩翁道話　柴田鳩翁の道話を息子の武修が筆記し編集したものである。鳩翁は京都の人、天保十年歿、年五十七。

小泉八雲　本名はラフカディオ、ハーン。英國よりの歸化人、詩人、明治三十七年歿。年五十五。

二一　悔悟の涙

小泉八雲

昨日、福岡から電報が來て、其處で捕へられた或重罪犯人が裁判の爲に今日正午着の汽車で熊本に送られることを知らせた。一人の警官が其の罪人護送の爲に福岡へ出張してゐたのである。

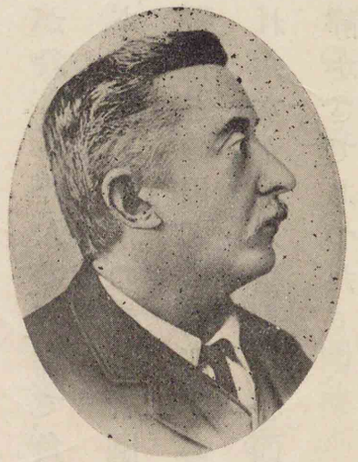
四年前の或夜、一人の强盜が相撲町の某家に入つて、家族を縛つて、澤山な貴重品を奪ひ去つたが、警官の爲に巧みに追跡されて其の贓品を賣捌く暇もなく、二十四時間内に捕へられた。併し警察署へ送られる途中、鎖を切つて、警官の劍を奪ひ取り、其の人を殺して逃げた。先週までは、それ以上其の强盜に就いては何も分つてゐなかつた。

所が、熊本の探偵が偶、福岡監獄を見に行つて其の囚徒の中に、彼の頭腦に四箇年間寫眞を燒付けたやうになつて居る顔を見付け出した。看守に向つて、「あれは誰です。」と尋ね

た。看守は「此處では『草部』と記入されて居る竊盜犯です。」と答へた。探偵は囚人に近付いて言つた。「お前の名は草部ぢやない。野村貞一だ。お前は殺人の件で熊本へ御用だ。」其の重罪犯人は、悉く己の罪惡を白狀した。

私は停車場へ到着する重罪犯人を目擊する爲に、大勢の人々と一緒に其處へ行つた。私は此の犯人に對する群集の憤怒を見聞する覺悟をしてゐた。そして、犯人に對して群集の暴力が振はれねばよいがと恐れてゐた。殺された警官は非常に人望があつた。今其の遺族や親戚は必ず此の群集の中に來て居るであらう。そして、熊本の群集は甚だ穩かであるとは言へない。また私は澤山の警官が警戒

して居るであらうと思つた。併し事實は私の豫想を裏切つた。



小泉八雲

汽車は忙しさと騷がしさとのいつもの光景、下駄を穿いてゐる乘客の急ぎ足と、からころと鳴る足音新聞やラムネを賣らうとする子供の呼聲の裡に停つた。

私共は埒の外で殆ど五分間程待つてゐた。犯人は警官によつて改札口から押されて出て來た。頭を垂れて、繩で後手に縛られた、大きな、粗野な男であつた。犯人も

小泉八雲自署

警官も共に改札口の前に停つた。群集は前に押出して併し默つて之を見ようとした。其の時、警官は大聲で呼んだ。

「杉原さん、杉原おきびさん、來てゐますか。」

背中に子供を負うて私の傍に立つて居るほつそりした小さい女が「はい。」と答へて、人込の中を押分けて進んだ。此が殺された人の寡婦で、負うて居る子供は其の人の息子であつた。警官の手の合圖によつて群集は引下つて、犯人と警官との周圍に場所があけられた。其の場所で、子供を連れた女が殺人犯人と相面して立つた。其の靜かさは死の靜かさであつた。

其の警官は、少しも其の女にではなく、唯子供に向つてだけ話した。低い聲であつたが、大層はつきりしてゐて、私は其の一言一句をも聞洩さないことが出來た。「坊ちやん。これが四年前にあなたのお父さんを殺した男です。あなたはまだ生れてゐなかつた。あなたはお母さんのお腹にゐました。今あなたを可愛がつてくださるお父さんのゐないのは、此の人の仕業によるのです。御覽なさい。」こゝで警官は犯人の顎に手をやつて、嚴かに其の顏を上げさせた。「能く御覽なさい坊ちやん。恐ろしがるには及ばない厭でせうがあなたの務です。能く御覽なさい。」

子供は母親の肩越しに、すつかり開けた眼で恐れるやうに見詰めた。軈て啜泣を始めた。涙を流した。併し畏縮

しようとする顏を眞直にして、從順に犯人をじつと見て、見て、見拔いた。

群集の息は止つたやうであつた。私は犯人の顏の歪むのを見た。そして、犯人が繩で縛られてゐながら、突然地上に倒れて跪いて、其處に居る群集の心を震はせるやうに、悔恨の情の極つたしやがれた聲で叫びながら、砂に顏を打付けるのを見た。「御免なさい、御免なさい御免して下さい。坊ちやん。そんなことをしたのではありません。逃げたさの餘り、恐ろしくて氣が狂つたからでした。大變惡うございました。何とも申譯のない惡いことを致しました。併し、私は私の罪のために死にに行きます。死にたいのです、喜んで死にます。だから、坊ちやん憐んで下さい、堪忍して下さい。」

子供はやはり默つて泣いてゐた。警官は慄へて居る犯人を引起した。沈默の群集はそれを通す爲に左右へ別れた。それから全く突然に全體の群集は啜泣を始めた。そして、日に燒けた其の警官が通る時、前に一度も見たことのないもの、滅多に人の見ないもの、恐らく再び見ることのないもの、卽ち警官の涙を見た。（田部隆次譯）

佐々木指月
彫刻家、文士。

二二　「否」と「然り」

佐々木指月

一千九百十八年九月、世界大戰爭の眞最中、私は北米合衆

國の人口登錄を紐育で受けた。私は紐育のユニオン角園の登錄所へ行つた。當時米國は第二國民軍の動員ををへて、第三國民軍の召集をしようといふ前であつたから、街路は星條旗の虹を靡かせて行進する軍隊の喇叭の音が、高い建物に反響し、市民はもう熱狂してしまつてゐた。青年といへば悉く軍隊の制服を纏ひ、纏はないものは老人と婦人と子供と外國人だけといふほどであつた。

ユニオン角園の登錄所で、私の名が合衆國の帳簿の上に登錄されて、やがて送附さるべき地方兵事課の召集狀を待つ身になつて、私は星條旗に對して熱心に敬意を表するものとなつた。一週間ばかり經つと、地方兵事課から呼出狀

が來た。出頭したのは丁度夕方であつた。

館内の廣いホールには星條旗を掲げられ、自由の女神コロンビアの繪箋は壁に貼られて、その上から電球が幾つか灯の葩を開いてゐた。呼出された人々ははや詰めかけてゐた。黑人もゐれば、猶太人もゐた。妻を同伴した英語を解せぬ人もゐた。

自由の女神像

私たちは女事務員から下調べを受けて、公式の宣誓場に

呼入れられるのを待つてゐた。獨身の市民は一も二もなく軍籍に入れられた。妻子があつても、財産のある人や、また收入のある妻を持つた人は同じく軍籍に入れられた。まだ市民になつてゐなかつた外國人でも、進んで召集に應ずる宣誓をなしたものもあつた。群集はこれに對して敬意を表した。

私の順番は廻つて來た。私は公式兵事委員の前に立つた。

「先づあなたは虚言を言はないといふことを、右の手を擧げてお誓ひなさい。」

私は右の手を擧げた。

「あなたは合衆國の市民ですか。」

「否。」

「あなたは合衆國の市民となる希望を持つてゐますか。」

私の心の中には或疑問が閃いた。幾人の日本人がこの問に對して「然り。」と答へ得るであらうか。日本人には合衆國の市民權を與へないことになつてゐる。併し、その市民權を得ようとする希望を持つてゐるかと問はれた時に、その希望をだに心に持つてゐないと答へれば、それはつまりこの國に同化することを拒むものであらねばならぬ。太平洋沿岸でもこの同じ問を發してゐるであらう。それについて我が同胞は何と答へてゐるであらう。私は暫く默

然としてコロンビアの繪姿を眺めてゐた。

この國の市民になるには、その人の本國とこの國と一旦戰端を開く曉には、その本國に對して銃を把るといふことを誓はねばならぬ。私にそれが誓へようか。いや私はこの國の市民となることを本心から望んでゐるだらうか。女神コロンビアの畫像は私が不知不識に抱いてゐた二重愛國心を憐む

コロンビアの像を描いたポスター

下圖のポスターには「『コロンビアの神は召す』即時合衆國の陸軍に應募せよ。」の文字が見える。

やうに見えた。

委員は緘默を守つて、私の答を待つてゐた。

「否。」

と私は答へた。すると更に問うた。

「あなたは合衆國の軍隊に加はつて合衆國の敵と戰ふ意志を持つてゐませんか。」

私には答をするのが苦しかつた。私はこの國に十三年來住んでゐて、その間此の國に養はれて來た。然るに、今この國が多くの犧牲を拂つて戰爭をしてゐる秋に當つて、この國の爲に戰ふといふ誓を拒まなければならないのを悲しんだ。若し一度意を決して合衆國の軍隊に加はつて大西

洋を渡るならば、私は自分が生れた國土を愛するといふ狹いけれども深い愛國心を捨てなければならぬ。私はそれをば善いことと考へ得るけれども、私の肉體はまだ故國の土に屬し、私の靈魂はなほ祖先のそれに屬するものであることを考へなければならぬ。私は、

「否。」

と答へた。

それでは、あなたはあなたの本國に歸つて、あなたの本國の敵と戰ひますか。」

何といふ用心深い質問であらう。何といふ意味の廣汎な質問であらう。今私等の敵と見なしてゐるものは獨逸及びその聯合國であるが、若し他日、日本がこの國と砲火の間に見ゆる日が來たとしたら、私等は本國に歸つて、この國と戰ふかといふ質問になつて來る。この國の市民になるの希望もない、この國の軍隊に加はるのも望まない、しかし、この國との戰には勇んで出るといふ誓を、今私は立てねばならぬ。私はこの時、私等はこの國から排斥されてもしかたがないと思つた。そして、

「然り。」

と答へた。

かうして、私はすぐ〳〵と宣誓場を離れた。下を向いて人々の中を通つて歩廊に出た。（中央公論）

北原白秋
名は隆吉、福岡縣の人、明治十八年生、詩人。

二三　新月

北原白秋

斷崖の松の木に
月ほそくかゝりたり。
ほそき月、
金無垢の月。

入海の波間にも
また月はしづきゆく。
沈々と
金の鈎。

金無垢のするどさよ、
絹灑の雨ののち、
しんじつに
走りいづるその蒼さ。

島黑く、海黑き、
眞の闇
舟ひとつ進みゆく、
その上に細き月。

なにかわかね、
魚族は目をさまし、
鈴蟲は一心に鳴きしきる、
虔の極り。

闇の夜は斷崖、
かげわかず、ゆく舟も見えわかず。
ただ光る細き月、
金無垢のほそき月。（白秋詩歌選）

二四　修善寺にて

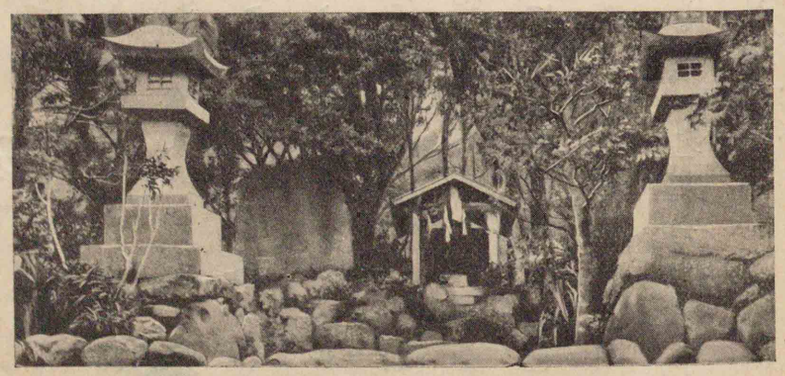
岡本綺堂

岡本綺堂
明治五年東京に生る、名は敬二
戯曲家。

修善寺
靜岡縣田方郡の温泉地

範頼
源範頼、頼朝の弟、蒲冠者又は蒲殿といふ。

朝飯をすませた後、例の範頼の墓に參詣した。墓は宿から西北へ五六丁、小山といふところにある。稻田や芋畑のあひだを縫ひながら、雨後のぬかるみを右へ幾曲りして登つてゆくと、その間には紅い彼岸花がおびただしく咲いてゐた。墓は思ふにもまして哀れなものだつた。片手でも押し倒せさうな小さい假家で、柊や柘植などの下枝に掩はれながら、南向きに寂しく立つてゐた。



範頼の墓

秋の虫は墓にのぼつて頻りに鳴いてゐた。

拜し終つて墓畔の茶店に休むと、おかみさんは大いに修善寺の繁昌を說き誇つた。あながちに笑ふべきでない。人情として土地自慢は無理もないことである。とかくするあひだに空は再び晴れた。きのふまではフランネルに袷羽織を着るほどであつたが、晴れると俄にまた暑くなる。或人の句に「木曾殿と背中合せの寒さ哉」といふのがあるが、わたしは蒲殿と背中あはせの暑さにおどろいて羽織をぬぎに宿に歸る。

午後三時、再び出て修禪寺に參詣した。名刺を通じて古寶物の一覽を請ふと、寶物は火災をおそれて倉庫に秘めてあるから、容易に取出すことは出來ない。しかも、こゝ兩三日は法用で取込んでゐるから、どうぞその後にお越し下されたいと慇懃に斷られた。去つて日枝神社に詣でると、境內に老杉多く、あはれ幾百年を經たかと見えるのもあつた。石段の下に修善寺駐在所がある。範頼が火を放つて自害した眞光院といふのは、今の駐在所のあたりにあつたと言ひ傳へられてゐる。して見ると、

修禪寺
肖盧山と號す、一名桂谷山寺、空海の創建。

修禪寺

この老いたる杉のうちには、ほろびてゆく源氏の運命を眼のあたりに見たのもあらう。所謂故國は喬木あるの故にあらずと、唐土の賢人は言つたさうだが、やはり故國の喬木はなつかしい。

次に頼家の墓所は單に塔の峯の麓とのみ記憶してゐたが、今また聞けば、こゝを指月ケ岡といふさうである。頼家が討たれた後に、母の尼が來り弔つて、空ゆく月を打仰ぎつつ「月は變らぬものを、變り果てたるは我が子の上よ。」と月を指さして泣いたので、人々も同じ涙にくれ、爾來こゝを呼んで指月ケ岡と云ふことになつたとか。蕭條たる寒村の秋

頼家　頼朝の長子、母は北條時政の女政子。

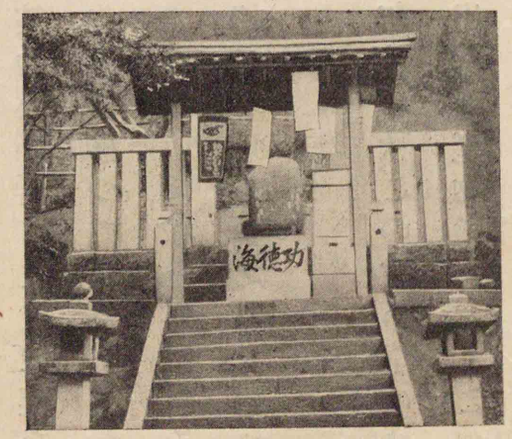
のゆふべ、不幸なる我が子の墓前に立つて、一代の女將軍が月下に泣いた姿を想ひやると、これもまた畫くべく歌ふべき悲劇であるやうに思はれた。彼の女が斯くまでに涙を呑んで經營した覇業も、源氏より北條に移つて、北條もまた亡びた。これにくらべると秀頼と相抱いて城と俱にほろびた淀君の方が、人の母としては却て幸であつたかも知れない。

わたしの戯曲「修禪寺物語」は、十年前の秋、この古い墓のまへに額づいた時に私の頭に湧き出した産物である。この墓と會津の白虎隊の墓とはわたしに取つて思ひ出が多い。その後、私はどう變つたか自分にはよく判らないが頼家の

秀頼　豐臣秀吉の子。
淀君　秀吉の側女。淺井長政の女。

墓はよほど變つてゐた。

賴家の墳墓の領域がだん〳〵と狹まつてゆくのは、町がだん〳〵に繁昌してゆくしるしである。十年前にくらべると、町は著しく賑やかになつた。多くの旅館には新築をしたのもある、建增しをしたのもある。溫泉倶樂部も出來た、劇場も出來た。かうして年毎に發展してゆく此の町のまん中にさまよつてゐる、町の運命になんの交渉も有たない一個の貧しい旅人のあることを、町の人たちは決し



賴家の墓

上杉景勝　上杉謙信の養子、秀吉に仕へて功があつた。元和九年歿、年六十九。

伊達左京大夫政宗　奥州に起つて、秀吉に從つてゐたが、關原・大阪の兩役德川に附いた。寛文十年歿、年七十。

て眼にも留めないであらう。わたしは薄倖な彼の一代をおもひうかべつゝ、又滅びて行つた源氏の運命を憐みつゝ、冷い墓と對ひ合つてしばらく默つて立つてゐた。それでも墓のまへには三束の線香が供へられてゐた。

（十番隨筆）

二五　武士氣質

上杉景勝が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸りて、搦手より攻入るべき由の仰承つて、大阪を打立ち、夜を日に繼ぎて馳せ下る。

白川より白石に至る間は、皆敵の中なれば、道塞がりぬ。

常陸國を廻りて、磐城相馬にさし掛つて國に歸らんとするに、相馬又累代の敵國なり。　恙なく通らんこと叶ふべからず。　然るに政宗は僅かに五十騎許引具して、常陸國を經て、磐城と相馬との境に至り、先づ相馬が許に使者を立て、「此の度德川殿、上杉を征伐し給ふに因つて、政宗搦手より向ふべき由を承りぬ。　路次既に塞がりて候ひし程に、東路に隨ひて漸く此の境に至り侍りぬ。　餘りに道を早めて打ちし程に、士卒悉く勞れぬ。　願はくは城下に旅館點して給はらん。馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず。」と言はせたり。

長門守義胤は是を聞いて、「あつぱれ運の盡きぬる奴ばらかな。ただにも伊達は相馬が年來の敵なり。　ましてや身方討たれん一方の大將承るといふ者を。　いで〳〵今宵一夜討して、案内知らぬ者どもを、此處彼處に追詰めて、一人も殘さず討取つて、年來の仇に報い、此度の賞に預らばや。」とて、頓て民家をしつらひて迎へ入れ、家子・郎從等召集めて、夜討の樣をぞ議したりける。

長門守義胤　相馬義胤。寛永十一年歿、年八十八。

爰に水谷三郎兵衛尉某、遙の末座より進み出で、「末座の意見恐入つて候へども、既に僉議の座に列なつて候上は、心に存ずる所を申さざらんは其の詮なし。　抑『窮鳥懷に入る時は、獵者もこれを殺さず。』とこそ承れ。　政宗ほどの大名が、既に年來の怨を棄て、君を賴みて來りしを、たばかつて闇々と討たんは、勇者の本意とする所にあらず。　長き弓矢の瑕瑾

なり。又我が城を去つて、彼の國の境、駒が峰に到らんこと、行程僅かに三里、けふの日未だ未の時に下らず。政宗おのが境に到らんとだに思はば、日ゆふべならざる間に到りぬべし。それに僅かの勢を以て此處に止ること、豈深き謀計なからざらん。只同じくは我が備を全うして、彼に代つて夜を守り、先づ此の度は本國に返し給ひ、重ねて戰に臨まん時、尋常に軍して、勝負を兩家の天運に任せらるべうもや候はん。」と申しければ滿座の輩、皆此の議に同じて、彼が旅館の邊に糧料・魚・鹽・秣・糠・藁に至る迄積置きて、夜に入り四面に篝火たかせ、兵共に夜を巡らせ、警衛心を盡くしてけり。

義胤が士共も、政宗が餘りに取鎭めたる體を見て、「憎しいざ彼が振舞を試みん。」とて、夜更けて馬一二匹切つて放つ。雜人ばら走り散つて、以ての外に騷ぎ罵る。政宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打掛けて、左の手に刀提げて立出で、「相馬殿の御人や候。御人や候。」と言ひし時、「さむらふ。」とて參りければ、「物音高う候。何事にや。政宗が雜人ばら狼藉候はんには、よく鎭めてたべ。」とて、又內にぞ入りにける。

斯くて夜明けけれども、立ちもやらず。巳の刻ばかりになつて、義胤が許に使して一禮し、靜かに馬をうつて行く。竊に人を付けて見せたるに、彼の國境の駒が峰のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く滿ちく〜て出迎へぬ。

斯くて關が原の合戰事終り、天下悉く平ぎて、相馬既に所

帶を沒收せられ、家ほろぶべきに極る。政宗德川殿に度々歎き奉りしかば、其のことなく年月を經て後、本領をぞ賜うたりける。此の時より彼の家、年毎の評定始には、滿座の輩一一に水谷が子孫の座の前に進みより、「水谷殿の御意見違ふ事あるべからず」と色代して罷出づること、長き佳例となりにけり。

（藩翰譜）

藩翰譜　新井白石の著、白石名は君美、德川幕府の儒官享保十年歿。

二六　噫第四十三潛水艦

福田一郎

福田一郎　熊本縣の人、明治十一年生、海軍少將。

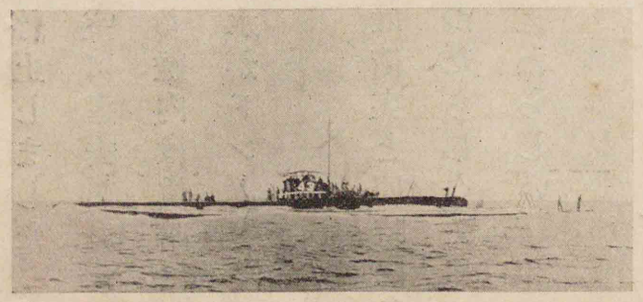
大正十三年三月十九日午前九時の頃、佐世保軍港外に於て演習中であつた第四十三潛水艦は、軍艦龍田と衝突して沈沒した。

沈沒と同時に浮上がつた彼の救難浮標内の高聲電話を取出して、直ちに艦内と通話を試みた。

初の間は故障があつて話が出來なかつた。心も心ならずしてゐる内に、四時十分頃に至つて完全に通ずる樣になつた。

此の電話は後部電動機室上のもので、前部の方の生存者の消息を知る機會を得なかつたのは、返す返すも殘念であつた。

此の電話によつて得た後部の生存者十八名の消息は、眞に悲壯・悽慘の極であつた。午後四時二十八分頃、



第四十三潛水艦

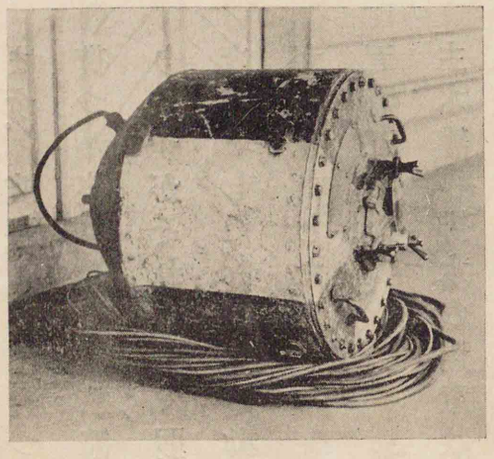
「衝突した様ですから、發令所に命を聞きましたが、何等の應答がありません。それで電動機を停止しました。機械室の者は衝突の音響を聞いて電動室に退去しました。電池の爆發と思はれる音を聞いてから艦内は眞暗になり、艦は左に五十度位傾斜しました。水がドン〳〵浸入して來ます。」

これに依つて見れば、發令所の艦長以下は衝突と同時に斃れて、主水罐（メインタンク）排水の號令を下す間もなかつたらしく、又其の時から後部と發令所との連絡は全く絶えたらしい。

四時三十七分頃、

「呼吸が苦しくなつて、山に登るやうです。」

空氣は海水のため次第に壓縮され、其の上酸素は段々減つて、炭酸瓦斯が段々殖えるばかりである。呼吸は分一分と苦しくなる。其の息苦しい呼吸の音が受話機を通じてありありと聞え、眞に聞くに忍びなかつた。受話機に就いてゐる者は殆ど堪へ得ないで、もう代つてくれ、もう代つてくれと、度度交代して辛くも聞取つたのである。



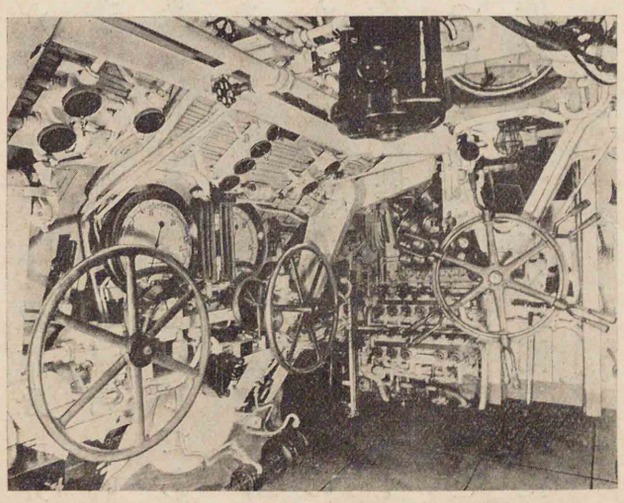
救難浮標

四時四十五分頃、

「空氣清淨器が六箇ありますから、三人で一箇の割に分配し、交代で之を吸つてをります。　演習の前に買つて貰つた懷中電燈が二箇ありますが、それも段々弱くなりました。　兩舷電動機が浸りました。」

五時五十分頃、

「主水罐の排水の用意はしてあるけれども、發令所の元瓣が開いてないから、之を開いて下さい。」



潛水艦內發令室ノ一部

小川機關大尉は水の中をジャブ、ジャブ渡つて來て、自ら電話に就き、苦しさうな、併し落着いた口調で、

「小川機關大尉より司令へ。　兵員は靜かに能く命を奉じて努力してをります。　沈著に泰然として各自配置に就いてをりますから、くれぐれも司令から御上によろしく御願ひ致します。　今足は海水に浸り、暗い中で働いて居ますから、少しでも早く救難の處置を執つて下さい。　空氣が惡くなつて、呼吸が大分苦しくなりました。」

六時四十分頃、

「今日中に揚がる見込がありますか、唯今何時ですか。」

暗中時間の經過がわかりかねるので、時々時刻を聞く。そ

して既に夜間と聞いて、作業の模様が氣にかゝると見える。

「呼吸が苦しいから今氣蓄器の空氣をヂリ〳〵出して居ます。」

と言ふので、「それは氣壓が高まるから、やめた方が宜しからう。」と注意すると、溫順しく。

「それではやめます。」

と言つてそれを止めた。

七時三十分頃

「天皇陛下萬歳」

を三唱するのが聞えた、隨分強い聲ではあつた。市村機關中尉始め多數の勇士は、此の時最期を遂げたのではなかつたか。

八時穴見機關兵曹長の聲で、

「しつかり賴みます。上は暗くて作業が困難でせう。」

上には探照燈や月の明りが十分あると答へたので喜んだ模樣であつた。

「皆遺書を書いて持つて居りますから、もう何も言ふことはありません。ドン〳〵海水が增して胸まで來て居ます。炭酸瓦斯が高まつて苦しい。もう二三人しか殘つて居ません。」

呼吸が非常に苦しいらしく、しつかり、しつかりと激勵する聲のあり〳〵と聞えるのは、大方友達の死ぬときであら

う。

八時十分、小川機關大尉は苦しい息の中から途切れ途切れではあるが、極めて明瞭に、

「一身上に關しては何もいふことはない、既に決心して居るから。皆様、願はくは國家の爲に最善の努力を賴む。」

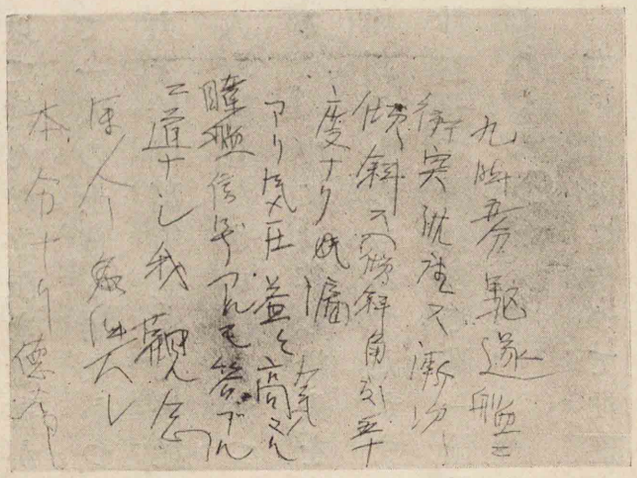
と儼として言つた。

八時三十八分、空氣の壓迫の爲に耳既に聾して最早上からの話聲も聞えぬらしく、

「唯天命を待つ。」

と獨語するのが聞えた。これで上下内外の音信は全く絶えた。思へば僅かに百二十呎を距て、電話までかはしながら、遂に之を救助することが出來なかつたのは實に千秋の恨事である。

後浮き上らせてから見ると、發令所には艦長心得桑島大尉・中比良大尉・町野中尉以下合計十三人が居たのであるが、衝突と同時に浸水したものと覺しく、何等處置を施す間なく職に殉じ、其の面には何等苦悶の色を見なかつた。



第四十三潜水艦殉職者の遺書

徳二等兵曹遺書
九時五分驅逐艦ニ衝突沈没ス漸次傾斜ス（傾斜角度五十度ナリ）漏氣アリ氣壓益々高マル瞭艦信號アルモ答フルニ道ナシ我觀念軍人ノ譽本分ナリ　徳
（遂は逐、瞭は僚の誤りであろう。）

前部水雷室には、壁・天井等十數個所にスクラッパー類を以て刻んだ立派な遺書がある。こゝで斃れたのは十四人で、一人の士官も居なかつたが、一同心を一にして防水に全力を捧げ萬策盡きた後、從容として死を迎へたと見え、誰一人取亂したさまはなかつた。二人の外皆遺書を懷にしてゐた。中には其の紛失を虞れて、數枚の紙に疊込んだ用意周到のものもあつたが、また更に之を手拭に卷込んで額に鉢卷して居たので、滿一箇月の後殆ど濡れずに殘つて居たものもあつた。

右の電話に依つて推察すると司令塔及び發令所は衝突の瞬時に浸水し、士官室と兵員室に居たものは何れも水雷

室に集まり、兵員室は其の後壓力の爲に昇降口が吹き上げられて浸水し、機械室の者は電動機室に退いて、同室の機關部員は十八名となつたが、浸水の爲に氣壓高まり、炭酸瓦斯の增加が著しく、何れも人事不省に陷つて斃れたものと思はれる。然るに、かゝる苦しい間にも各〻自若として其の部署を守り、上下一致して靜かに作業を續け、電話の話聲も少しも平常と異ならず、而も一言私事に及ばず、唯國と艦との みを念頭に置いて、救助に關する注意を絶えず事細かに進言し、遂に人事を盡くして天命を待つに至つたものである。其の沈着にして勇敢なる、眞に軍人の龜鑑で、所謂、留取丹心照汗青とは此の事である。後日前部諸室を檢すれば、此處

には一名の士官も居なかつたに拘はらず、奮鬪の跡は電動機室にも增して目覺しく、然も初より艦外交信の途全く絶えた爲に、各員心中の苦鬪は思ひ遣るだに痛ましい。試みに燭を秉つて水雷室を窺へば、艦壁影濕やかにして鬼氣の人に逼るを覺えた。（潜水艦の話）

新制大日本讀本　卷三終

昭和六年六月十三日　初版印刷
昭和六年六月十六日　初版發行
昭和六年十一月二日　訂正再版印刷
昭和六年十一月七日　訂正再版發行

不許複製

新制大日本讀本
奥附

定價	
自卷一 至卷四	金六拾參錢
自卷五 至卷十	金五拾八錢

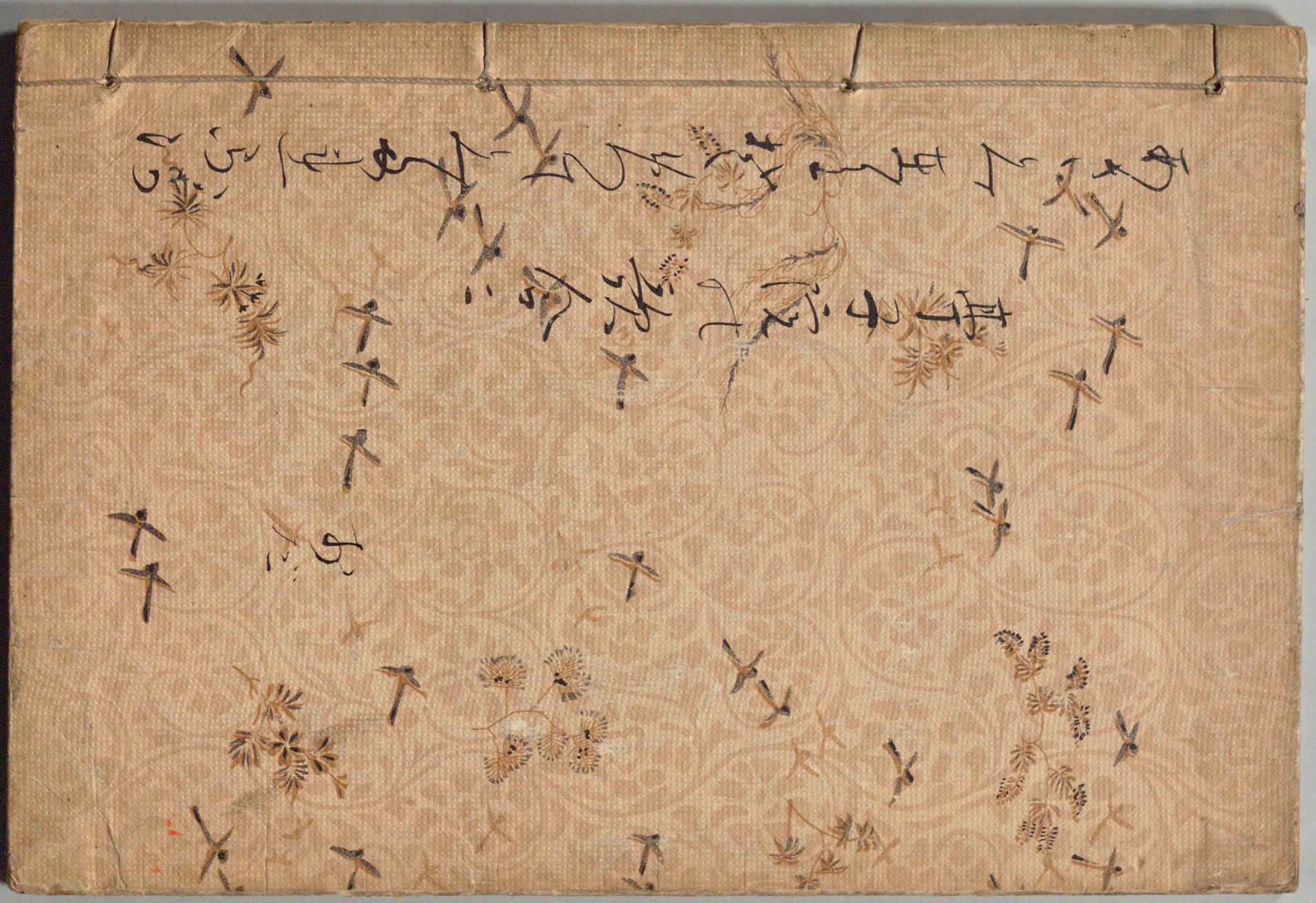
著作者　藤村作
發行兼印刷者　東京市京橋區銀座一丁目五番地　大日本圖書株式會社　代表者專務取締役　杉山常次郎

發行所　東京市京橋區銀座一丁目五番地　大日本圖書株式會社　振替口座東京二一九番

東京・株式會社秀英舍印刷

二分鈴木三郎第貳十四號ノ技

貳

參

小田博章